

---

# 神庭の最後の住人

竜灯草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神庭の最後の住人

### 【Nコード】

N0326U

### 【作者名】

竜灯草

### 【あらすじ】

一応はVRMMO トリップ、のつもり。  
デスゲームではなく、帰る方法を探す訳ではなく、技術を持ち込む訳でもなく、あくまでゲームだけどやっぱりもう一つの現実で？  
そんな微妙な距離感の2つの世界。その内の片方で進んでいく、  
ほのぼの的日常冒険譚。

趣味とノリで書かれております。途中で破綻する・伏線回収不可・更新に数カ月かかる等の危険が高いです。

## プロローグ その世界は眠りに落ちる

『じゃあまあ、頑張ってくださいね。 また何かあったら連絡ください』

ある日の夜、いつものようにゲームを起動して所属しているギルドの掲示板を覗くと、そんな書き込みが残されていた。 ニユースの所を見れば、そっけないシステムメッセージが、先程の書き込みの主がギルドを脱退した旨を告げている。

同時に、ギルドマスターの権限が私のキャラへ譲渡された旨も告げられていた。

これが委任ではなく自動的に行われた、という辺りに一抹の寂しさを覚えるが、メンバーの中から選ばれて委任された、となれば全力で辞退していただろうから仕方ない事だ。

現在、このギルドのメンバー数は1。

つまり、私のキャラ「Fortuna」、通称フォーのみだ。

ギルドの崩壊、というのは、サービススタートして長いこのブラウザ型ゲーム『Free to There』ではもう珍しくない。 現在生き残ってまともに活動しているいるギルドなんて、精々上位ランカー達が形成し戦争を繰り返している因縁のよほど深い一部か、果てが無いんじゃないかと思う程のやり込み要素を探求する物好きの集団くらいだろう。

ましてやフォーが所属しているのは繋がりも緩いまったく系ギルド。 新規参入者もいるのかいないのか分からない現状、初心者歓迎なんて文句は「狩ってください」と言っているようなものだし、狩られるのを待つばかりの状態では長続きしない。

…… 実際、何人かのメンバーは上位ランカーの食い物にされてい

た。ただただ集めたアイテムや経験値を奪われ続ける事が楽しいかと聞かれれば、答えはNOだろう。そして、楽しくないゲームはやる価値なんて無い。

そんな訳で、元々緩かった為に崩壊するのも早く。

そうやって瓦解が決まったギルド。それを、フォーがたった1人、引き継いだ。

特に何か展望がある訳ではない。1人から再興する為に意欲を燃やす、という訳でもない。それどころか、何かやりたいと思ってもいない。

ただの、初心者らしいくだらない理由で、私はギルド『ミスラの庭』を引き継いだ。

その、おおよそ2ヶ月後。

『Free to There』は3周年を迎えると同時、終了が決定した。

プロローグ その世界は眠りに落ちる（後書き）

いろんな話を読んでみると、つい……

## 一話 幸運と世界の目覚め

2XXX年。ゲーム業界はVRMMOの登場によって、その勢力圏を大幅に変えていた。

かつての大御所なぞどこ吹く風。次々とベンチャー企業が林立し、あつという間に大乱戦状態に。

お前らはどこの厨二病者だと突っ込みたくなる名前のゲーム会社がVRMMO覇権を競う中、実にひっそりと『Free to Th here』は公開された。

初期のVRMMOによって発生した諸々の問題を改善する為、現在VRMMOをするためには病院が隣接、または病院内に存在する施設に行かなければなくなった。その上4時間以上の連続接続（VRMMOに関しては“ダイブ”というらしい）は禁止、1日の最大接続時間は12時間以下、と、行政によって法律で定められている。それでも日参する人間が多い辺り、VRMMOはとんでもない中毒性を持つということなんだろうが……その移動する手間と、何より接続料・課金額が高い事もあって、まだ敬遠する人間が多いことも事実だった。かくいう私もその1人。

『Free to Th here』はそんなVRブームの中、あえて平面であるブラウザで勝負しようとするスタンスを取っていた。2Dの俯瞰視点で見るアイテム課金制のその世界は、そういうVRを敬遠する人間を虜にするだけの魅力を持っていた。

レベル・スキル併用制で、どちらも今までの物に比べて上がりやすく設定されていた。それでいてダンジョンの数は異様なほど多く、時間経過で出現と消滅を繰り返す物まである。クエストは言わずもがな、グラウンド・クエストに相当する物こそ無いもののランダム生成され、時折どう考えてもクリア出来ないんじゃないかと思うもの

まで発生したりする。

両手の指以上の豊富な種族が用意され、キャラ作成時のダイスの目によっては世界にたった一つのユニークスキルが最初から付いていることもあった。スキルの種類はもはや“膨大”以外に形容詞が見つからない。アイテムの数は数える方がバカだ。プレイヤーによって作成されたアイテムは名前どころか外見までいじれるのだし。

何より特徴的だったのは、王道アクションRPGでありながら、一定の条件を満たせば都市育成シミュレーションも可能である所か。

レベルといくつかのアイテム、一定量のギル(ゲーム内通貨)をもってあるクエストを受けると、ゲーム世界の好きな場所に自分の『町』を作ることができる。もちろん道の真ん中とか街の中とかは範囲対象外だけでも。

同様の手順で、ギルドの本拠地も作ることができる。ただしこちらはクエストを受ける際の条件次第で空中と地下も選択できるから、自由度は遥かに高い。確実に『Free to There』でギルドが乱立した原因の一つだ。

そんなこんな、一体どれほどの開発費を投じたのやら不明な力の入れ方で、ろくに宣伝もしていないにも関わらずVRに流れなかつた人間をほとんど全て吸収することに成功した『Free to There』。

その“自由な場所”は、ほんの1ヶ月ほど前に、永久に失われた。

飽きつばい私としては異様なほどのめり込んでいた『Free to There』が終了して1カ月とちょっとの頃。やはりブラウザはVRに勝てないのか、と落胆しつつ、面白いニュースでも無

いかなとネットの海を泳いでいた。

もちろん今まで無かったものが急に表れる訳もなく。ため息をついてブラウザを閉じた時、パソコンのメールアイコンが点滅している事に気がついた。それを見て眉をひそめる。

「……おかしいな。迷惑メールが来たら困るから、こっちのアドレスはどこにも出してない筈……」

独り言を呟きつつ、それなら両親とかその辺だろうか、と見当をつけてメーラーを立ちあげる。1つだけ【未読】となっているメールの宛名を確認して……私は小さく「え？」と声を上げた。

そのメールは、今は存在しない『Free to There』からのお知らせメールとして送られてきていた。……その下には【既読】アイコンで『Free to There』サービス終了のお知らせ」というタイトルのメールが、上の物と全く同じアドレスから届いている。

「……再開する、とか？」

自分でもありえないと思いつつ、メールを開く。特にウィルスが発生する、という事も無く展開される、どこかそっけない文章。

飾り立てる事をせず、ただただ連ねられた文字を追って行く。画面をスクロールさせて読み進め、頭の中で内容を要約。

「なるほど……『Free to There』は来週の土曜からVRMMO『Fragment of The World』”として再開する事になって、一定期間以上『Free to There』をプレイしていた人には特典があります。システム的にはアイテム課金制のままだから是非いかがですか。……と」



メールの最後には私がフォーとして使っていたIDとパスワード、それに何かのシリアルコードらしき文字列、謎のURLがくっついていた。

ここまで引つ張ってウイルスという事はないだろう、と判断してクリックすると、開いたのはVR施設を検索するツールサイトだった。なるほど、これを使って通いやすい所を探せと言う事か。

「でも確か、専用の新規施設を立てるか、大病院に居候させる形でした無かった気がするー。……一番近い大病院だと片道が電車で4駅だから……交通費が0で片道15分切る場所だったらやってもいいんだけどー」

試しに近くの公園の場所を使って検索してみる。……5秒後、我が家行きつけ、片道3分の病院が候補に挙がった。その後もいろいろと条件を変えてやってみるが、出てきた結果は最大が片道歩いて8分という予想外の好条件。

いつの間にやらVRはあちこちに浸透していたらしい。ここ数年病気も怪我もしてないから気付かなかった。

多数の中毒者を出し続けるVRMMOの世界。

そこに、あの“自由な場所”が名前を変えて現れる。

「……まあ、特典とゲーム内環境次第、ということー」

しばらく考えた後でそう独り言を呟いて、私はパソコンの電源を落とした。

そして、来週の土曜日。

私は片道3分の行きつけの病院に、全くの健康体で訪れていた。

一話 幸運と世界の目覚め（後書き）

……まだVRには入らないのかと。  
申し訳ない……

## 二話 幸運とその世界の入り口

しわしわのおじいちゃんな医師が1人の小さな病院、というより診療所。たまに娘さん夫婦（どちらも医師免許を持っている）が子連れで手伝いに来てるくらいで、あとは持病などの患者さんが数人ちらほらとみえるくらい。

それが我が家行きつけ、片道徒歩3分の田中診療所だ。

あのメールがきたときはここがヒットしたことに驚いたけど、よく考えたら小さい子や待ち時間の長い人もいるから導入しても不思議じゃないのかもしれない。というか、そんなに賑わってるようには見えないのだけど、導入費とかは大丈夫だったんだらうか。

そんなことをつらつら考えながら門をくぐり、ガラスの引き戸を開けて中に声をかける。

「おじーちゃん、こんにちはー」

「おお、こんにちは。元気じゃったか？」

「ん、元気だよー」

ちょうど休憩していたらしいおじーちゃんこと、田中医師とそんなやりとりを交わす。「そうかそうか」とおじーちゃんのほほんと言っただがまとめて挨拶だ。

「そうかそうか。だったら元気に外で遊んでなさい」

「はい、ってそうじゃなくて。おじーちゃん、病院に新しい機械入れなかったー？」

「うん？ 新しい機械？」

おじーちゃんは湯飲みを片手に考える格好。その間に診療所を見回して新しいものがないか探してみる。

私が右手の奥に新しいドアを見つけると、おじーちゃんが湯飲みを机において思い出すのがほとんど一緒だった。

「おお、そういえば4月ほど前じゃったか、香津美がなんぞ難しいことを言っとった。かいせんとか、ねつとか、よく分からんから好きにさせたが」

「なるほど、あのドアの向こうだねー。入っていい？」

「ええぞ。確か、香津美が人を居らせとるはずじゃ、その人に聞きなさい」

「はい」

返事をしてドアに向かう。4ヶ月前、かなり最近に設置されたものということは、つまり最新式の本体ということだろうか。考えながらもとりあえず、曇りガラスのはまった外開きのドアを手前に引き開ける。

ちなみに香津美というのはおじーちゃんの娘さんのことだ。話によれば旦那さんと一緒にかなり大きな病院に勤めている凄腕の医師らしいが、この診療所で見える姿はのほほんとしたいつまでも若い幸せな奥さんといった感じ。のほほん、とした雰囲気は、遺伝？

そういえば、子供さんもどっちかっていうと癒し系の雰囲気だった、と思いつきながら、滑らかに開いたドアの向こうに一歩を踏み出す。

「おや、こんにちは」

「あ……こんにちは」

そこには何台かの巨大な機械を背景に、白衣を着たお兄さんが立っていた。手には何かのチェック用紙とペン。見知らぬ人だ。そこに若くて笑顔がなんだかへらへらした感じ。

「“Lucid Dream”に何か御用かな？ それなら悪いけど少し待ってほしい。今簡易メンテ中なんでね」

「はあ……分かりましたー」

こちらが何か言う前に言われて、私はおとなしく引き下がる。壁際に並べられたいくつかのパイプ椅子を見つけて、その端っこに腰掛けた。

……“Lucid Dream”って確か明晰夢って意味だったよな。VRは意思のある状態で見える夢のようなものだから、機械の名前にしては直球というか分かりやすいというか。

そうやって待っていると、数分もしないうちに白衣の人は戻ってきた。

「お待ちせしたね。僕は葉咲舟斗か咲ふなと、“Lucid Dream”のメンテナンス要員兼田中診療所担当者だ」

メンテナンス要員の肩書きが先に来たあたり、この4ヶ月は暇だったようだ。

もしかして私が始めての利用者じゃなかつたかと思いつつ名乗り返し、先日来たメールのことを話す。そしてそのためにここの機械を使いたい、と。

「『Fragment of The World』<sup>□</sup>、か。えーと……ああ、確かに今日からサービススタートだね。ところでそのシリアルだけど、今持つてるかい？」

途中で携帯電話のような端末を操作して情報を確認した葉咲さんは、1つ頷くとそう言ってきた。あのメールをプリントアウトした紙を取り出すと、にっこりと笑顔になって体をずらした。

背後にあった大きな機械は、薬のカプセルを人間1人が入れるく

らしいの大きさに拡大し、120?ほどの四角い箱に立てかけたような形をしていた。葉咲さんは箱の上の部分を持つと、ガコ、と手前に動かす。蝶番でもついていたのか滑らかに開いた箱の内側には、平面部分にキーボードと画面がついている。

なんだこれ。と思っていると、葉咲さんの方が先に口を開いた。

「サービスが始まるまでまだ少し時間があるから、その間に機械のレクチャーをしておこう」

反対する理由はないので頷いておく。

説明としてはすでに知っていた時間の制限についてと、終了30分前に警告が流れ、4時間が過ぎると強制切断されること、ゲームに関する課金はネットマネーによって行うこと、そしてVR本体“Lucid Dream”の利用代金は併設されている施設及びゲームソフト会社に請求するため、プレイヤーが使う分には無料であること、後は常識の範囲で利用することだった。

なお、さつき新しく引き出したキーボードと画面は、今回のメールのようなシリアルコードを入力する際に使いたい。“Lucid Dream”には現在サービス中の全てのゲームタイトル、そのそれぞれ専用のページが用意されていて、ゲームタイトルで検索して打ち込めばいいんだそうだ。

とりあえず『Fragment of The World』で検索し、思いのほかシンプルなそのページに『Free to There』で使っていたIDとパスワードでログイン。プリントしたメールの文面と視線を行ったり来たりさせながらシリアルコードを入力した。1秒と待たず『特典が付与されました』との文面が浮かんだので、ログアウトして入力端末を四角い箱に戻す。

「ちなみに、4時間が過ぎると強制切断されて1時間再接続できないけど、自分で落ちれば1分後には再接続できる」

「なんとという裏技。ってかそれ時間制限の意味ないんではー？」

「そのための病院だ。さらに、機械の中に食べ物を持ち込むことはルール違反だけど、僕に預けてもらって機械から身を乗り出して食べるのはセーフ」

「これまたなんという職務怠慢ー。いいのか担当者」

「君はまだ学生のようにだしこれから長そうだから、このサービスは特別一回につき100円でどうだ」

「なんだかすぐ後ろめたいけど明日からお願いしますー」

最後の会話に不穏なものを含みつつも案外普通の説明が終わると、『Fragment of The World』のサービス開始まで10分を切っていた。私はそのまま利用すると答えて、薬のカプセルを人間が入れるくらい大きくして斜めに固定したような、真つ白な機械のふたを開けた。

中には不思議な色のマツサージチェアのような椅子が1つだけ。入り込んで触つてみると、ジェルのようなものを詰め込んでいるようにぶにぶにだった。円形の本体にあわせて曲がっているふたをスライドさせて閉じ、その座り心地最高の椅子に深く腰掛ける。

真つ暗になった機械の中、正面のふた裏にいろいな注意事項が映し出された。ふたのロックは内側からしか外せないこと、体調に異変があった場合と時間超過の場合は強制的に追い出されること等。それが終わると今度は装置の使い方が映し出される。私はそれに従って頭にヘルメットをかぶったり、手首に血圧計のバンドを巻きつけたりとごそごそ動く。

チェック項目をすべて満たすとしばらくじっとしているように言われる。ジェル椅子に体重を全部預けて待つこと数秒、『問題なく起動準備が完了しました。ゲーム名を発声することでダイブを開始します』という文字列が並ぶ。

「……いよいよ、か」



いきなり膨らんできた期待と緊張を、深呼吸をすることで追いつく。

それでも期待が勝って残る中、私ははっきりとした発音を心がけてゲーム名をコールした。

「『Fragment of The World』！」

二話 幸運とその世界の入り口（後書き）

引っ張りすぎだと。そのとおりですごめんなさい……

### 三話 幸運と空中庭園

のっぺりとした白い空間でIDとパスワードを入力してログイン。その後ウィンドウの開き方やアイテムの使い方等のチュートリアルがちよつと昔にネットを席卷したネギを持った歌姫によく似ている合成音声で開始。

一通りマネキンのような体で動きを覚えると、今度は目の前に可愛らしい女の子が現れた。

腰まである黒いストレートの髪、くるつとした黒い目。ただし耳は長く尖って先端に黒い鱗があり、腰から生えるしなやかな尻尾も同様に黒い鱗に覆われている。背中にはこれまた真つ黒な翼がたたまれていて、黒に白いラインの入ったシンプルなワンピースをまとい、どこか人形のような雰囲気を持つ身長は、確実に私より頭一つ分は低い。

どこかで見たような、と思いかけ、すぐさま思い出した。

彼女は fortuna。愛称をフォーといい、『Free to There』での私の分身である。

希望すればキャラ画が付いてくる、と言う事でさつそく申し込んだら、「本当に無料で受け取れんのコレ!？」と思わず驚愕した繊細にして可憐な画。その通りの相手が現実としか思えない精緻さで目の前に居るといふのは、VRに対する色々な不安をぬぐいさつてお釣りがきた。

自分の分身だった姿に思わず見惚れていると、りりん、と鈴のような音がしてウィンドウが目の前に開く。

『キャラの名前を変更するとボーナスが付加される可能性があります。キャラの名前を変更しますか? (ボーナスの付加は現在のステ

ーナスに加算される形となります)』

これは『Free to There』に入れられている力が半端ではないと実感したシステムだ。……実際の所、自分の分身在フォーに決まるまで何回やり直した事か。シンプルな名前の方がボーナスが良いと気付くまでかなりかかった。

システム文の下に表示されている、現在はfortunaとなっている入力窓をしばらく睨む。……正直に言つて、かなり迷つた。

ボーナスの付加というが、実際はユニークを含めた全スキルからランダムに与えられるものであつて、中にはゲーム内時間で日中に行動できない、とかいうマイナススキルも含まれる。

現在、というか、『Free to There』でフォーはそこそこ強くらいには強くなつていたから、行動制限系のマイナススキルで無い限りは大抵なんとかできる、とは、思つのだが……

『キャラの名前を“Luck”に変更しました』

悩みに悩んだ末、私は名前をラテン語から英語へと変更した。その意味は“幸運”。大当たり中の大当たりを引いたフォーと同じ意味の名前なら、そこまで悪い結果にはならないだろうと考えて、ボーナスの誘惑に負けた。

『ようこそ』Fragment of The World』  
へ。ゆっくりしていつてね!』

どう考えても狙っているセリフが文字列で踊り、私の意識はホワイトアウトした。

白さが収まって視界に広がったのは、どこまでも突き抜けるような青だった。

風が耳元を吹き抜けていく。あまりに鮮やか過ぎて、その青が快晴の空だと気付くまでにしばらくかかった。視界の端を何か白い塊が掠めていった。……雲？

そしてようやく、私は自分のいる場所がおかしいことに気がついた。

「って何で空中に放り出されてんのぉおおおおおおお！？」

妙に体が軽いとは思ったけど！ 風の音がやけにうるさいとも思っただけど！ チュートリアルでは『始まりの町』の広場に転送されるって説明だったのに！？

今までの人生で一番叫びながら、上下も分からず落ちること数秒。唐突に背中に衝撃が来た。どぶん、というクッションか何かの上に落ちたような感触に、とりあえず落下が終わったと思ってひとまず息をつく。

「あーびっくりしたあぁっ！？」

その途中でずりりとすべる感触がして再び落下。1秒後、ぱっしやーん！ と派手に水しぶきがあがった。

……どうしてログイン早々こんな目に。とか思いながらぷかりとその場で浮いてみる。やはりゲームなのか水が目にしみることはなく、音と水の流れから噴水らしいこの場所の底を眺めていた。水中効果のせいかなやばやけているが、澄んだ水の下にあるのは美しい

模様。

しばらく眺めていると、どーにもその模様に見覚えがある気がしてきた。パニツクだった頭も文字通り冷やされて落ち着いてきたのもあって、とりあえず現在位置を確認することにして縁らしいところまで泳ぐ。

ザバツ、と音を立てて水から上がり、長い髪を絞って水を落としてから、後ろを振り向いた。

目の前にあつたのは澄んだ水を噴き上げて落とす白い石でできた巨大な噴水。大小ある噴き上げ口から出てくる水が幾重にも虹を作り、噴水そのものに施された文字列のような彫刻とあわせて非常に美しい。

その周囲に広がるのは様々な花が咲き乱れる広い庭園。300人位パーティで入ったとしても余裕なくらいの広さがある。

そしてその向こうには、空を背景として中世風のお城が建っていた。何と云うか、RPGで定番の、尖塔が3つとそれより低い天蓋が丸くなっている塔が2つ、色は全体に白、まぶしすぎない程度に金が使われている……という、絵に描いたような『お城』だ。

周りを見回して、お城から3mはある石造りの柵が伸び、ぐるりと庭園を囲んでいることと、その柵の向こうにはどこまでも青い空と白い雲海しか見えないことを確認して、私は思わず納得の声をこぼした。

「……………あー、なるほど」

この空中庭園はギルド『ミスラの庭』、その本拠地として作られた美しい要塞だ。ミスラ、とは世界中の様々な神話に登場する英雄神で、本来の姿は契約と友愛を司る中性神だが、後々に真実の守護者、太陽神、軍神、司法神、豊穡神ともはや何でもありになった人気神である。

ちなみに、このギルドで冠している“ミスラ”は契約を司り、真実と太陽に強い関係を持っている、ということになっている。

なおこの本拠地設立当時のギルドマスターは「太陽神なのだから空中に浮かべよう!」という理由で難解極まるクエストをギルドメンバーを巻き込んで半ば強引にクリア、その他の必要材料もメンバーが泣きを入れるほどレアなものを取り揃えて建造したという逸話がある。あの時は本当に苦労した。

……まあ、そのギルドマスターも現在はどこで何をしているのか分からない。現在このギルドに所属しこの本拠地を利用するのは、私だけなのだから。

「……しかしサービス終了からリアル1ヶ月経ってるし、維持費とか大丈夫なんだろうーか」

ちょっとしんみりした気分を、声を出して吹き払う。本拠地の維持にはプレイヤーが所有する『町』で得ることができる特定の材料と、その本拠地ごとの特性によって異なる固有のモンスター素材が必要となる。

サービスが終わるなら持っけていても仕方がない、と、あの時点で手持ちの分を全部こちらの倉庫に突っ込んでおいたし、ギルドを辞めると同時に引退した元メンバーがほとんど全財産を倉庫に入れて行ってくれたから、1ヶ月といわず半年くらいなら余裕で大丈夫な量が貯まっている筈。

とはいえ、確認しておくに越したことはない。

勝手知ったる神の庭を、私は城へと駆け出した。

三話 幸運と空中庭園（後書き）

タイトルの意味はコレです。



#### 四話 幸運とエンカウント

結論から言うと、ギルドの倉庫には向こう1年は放置しても大丈夫な程の資源が貯蓄されてあった。

その量に呆然とする事数秒。私は静かに倉庫の扉を閉じて城の階段を上り、城の中で最も高い中央の尖塔の最上階へ。

そこに安置してある白い石の台座で、自身と同じくらいありそうな巨大な本を抱えて爆睡中だった長い金髪の……少年？ に小さな声で「お久しぶりです」と声をかけて速攻で撤退。

そのまま隣の、唯一天井部分が平らになっている尖塔と城の裏手に行つて、元・栽培農園だった場所から草花系の素材を一通り採取。隠し部屋である地下室にある階段から、空中庭園の基部にもぐつて要塞のコア（浮遊する為の物と全方位防壁を展開する物とその他兵器のエネルギー源の3つ）の状態を確認。

最後にもう一度倉庫に寄つて、山のように放り込まれていた装備やアイテムの中から自分で放り込んだものを探し当て、チュートリアルで学んだ通りにウィンドウを開いて整理をして、準備完了。

「んでは、改めて出発するのでしょうか」

装備に不備が無い事を確かめて、アイテム欄から1つのアイテムを取り出した。丸めた羊皮紙のような茶色っぽい紙を広げて掲げ、呪文を唱える。

「スクロールLv2 『<sup>フライ</sup>飛行』」

一瞬光って消える紙。引き換えに足元から風が巻き起こって、私[は](#)あつという間に空へ飛び出した。半分勝手に背中の翼が広がって

風をつかみ、一気に速度が上がる。

ファンタジーでは一般的な、スクロールというアイテムを使つての魔法。……驚いた事に『Free to There』では、火属性魔法なんかの各属性魔法系統、回復魔法なんかの支援魔法系統サブなんかに混じつて『アイテム使用魔法系統』として確立していたりする。

系統と言うのは、一度学ぶとそれ以外の系統の魔法は使えず、別の系統の魔法を使おうと思つたら今のを完全に忘れて学び直さなければいけない、というシステムの事。

系統は魔法に限らず、武器の種類や前衛後衛の戦い方の差、生産系統まで多岐にわたつていて、例えばメイン武器：系統A＋魔法：系統B＋補助技能：系統C＋生産技能：系統Dと、最大4つ組み合わせビルドて育成方針とする。当然ながら被ると言う事は滅多に無かつた。しかもどれもこれもご丁寧ヒトリに非常に分かりやすい『弱点』が設定してあつて、1人でカバーしきるのはほぼ不可能。嫌がおうにも他プレイヤーと協力しないとやつてられないシステムになっている。

なお、3周年で終わりを迎えた『Free to There』だが、ほとんど全てのプレイヤーの情報を統合しても、系統の派生図はついに完成しなかつたらしい。「まだまだ発生条件不明な系統があるまま終わるなんてErrorize」「つかこれ絶対コンプ無理だろ」とかいう超やり込み派暇人プレイヤー達の書き込みがゲームの掲示板に殺到したのは記憶に新しい。

閑話休題。

そんな訳で、人生初の飛行にテンションは上がりっぱなし。しばらく練習して思つた通り飛べるようになってからは空中宙返りなんかしてみたりして、思う存分空の旅を堪能しながら進む事約1時間ちよつと背面飛行に挑戦していた私は、進行方向に雲を突き抜けるほど高い一つの山を見つけて姿勢を元に戻した。

『Fragment of The World』の地理が『Freeto There』と同じであれば、目の前にそびえるこの大陸の最高峰、エリブルース塔山のふもとに『始まりの町』はあるはずだ。ちなみに塔山は全ての大陸の中央にそびえる恐ろしく高く険しい山で、結局最後の最後まで、どの塔山も誰一人として登頂する事は出来なかった。

最後の一週間で、生き残っていたほぼ全てのプレイヤーによって組まれた超巨大パーティによる登山、それすらも返り討ちにされた時の報告書、そこに書かれていた難易度の滅茶苦茶さを思い出して、知らず苦笑が零れる。やがて建物の群れと、それを取り囲むような石造りの壁を見つけて、私はスピードを落として降下に入った。着地地点を探して地上を見回してみる。

「……んん？」

そんな私の視界に、複数の狼っぽい獣に追っかけられている幌馬車が入った。草が生えてないだけの道を、土煙を派手に上げながら爆走中。思わず滞空しながら眺めていると、幌馬車から誰かが転げ落ちるように飛び出した。着地に失敗しつつも、きらりと光を反射する武器っぽい物を獣に向けて、走り去る幌馬車を守るように立ちふさがる。

使い古された感もある状況を上空から眺め、私はため息と共に一言呟いた。

「……どー考えてもイベントフラグですありがとうございました」

実はこの手のイベントは『Freeto There』においてかなりの確率で遭遇する。結構厳しい条件が多い割に報酬が無い事も少なくないのであまり人気は無いのだが、無視すればやたらめったら重いペナルティが課せられる為に、ある種の災害、または不

幸として認定されていたイベントクエストの一種だ。

「ここまでの状況から考えて、『Fragment of the World』でもこの手のイベントは無視すれば手痛い目にあうだろう。流石に『始まりの町』周辺のイベントで報酬0という確率は低いだろうし、一般的な感覚として助けられるのに放っておくと言つのは少々以上に胸が痛む。」

「ま、ポジションの1つや町の案内があれば上々ってことで」

「装備が戦闘用になっているのを確認してそう呟いて、私は眼下へ急降下する体勢に入った。」

#### 四話 幸運とエンカウント（後書き）

飛ぶのはすごく楽しいらしいです。

四・五話 その世界に舞い降りたもの(前書き)

気が付けば……

PV4 / 500・ユニーク1 / 000突破……っ！

ありがとうございますー！！

#### 四・五話 その世界に舞い降りたもの

その依頼はなじみの相手からのなじみのものだった。駆け出しの頃から世話になっていいる仕事だから、ついでにこの間拾った初心者も同行させることにした。

その際自称・弟子たちが大挙して現れたせいで逃げ回る羽目になり、それを知った依頼主に苦笑されてしまった。まあ、もともとこの依頼主には駆け出し時代の色々な事を知られているから、もはや今更という気にもなつたが。

依頼自体が低難易度で手馴れている、ある意味骨休めの小旅行にも似たものだったのもあって、それ以上は考えるのをやめて準備にかかった。

町から町へ、安全なルートを選んで通る馬車の護衛。

……そんな風に、なめてかかったのが悪かったのだろうか。

「に、ニーレニアさん、僕、もう、魔力が……」

「分かった。あまり薬を使うのも体に悪い、休んでいる」

暴走しているような速度で走る2頭立ての幌馬車、そのひどく揺れる荷台で連れてきた初心冒険者のシエレスが泣きそうな声で言った。16歳で成人したばかりの彼は魔術師を志しているため、剣士に比べて体力は劣る。

現在この馬車はモンスターに追われている。牽制の意味で魔法を撃ってもらっていたが、あとはこちらの弓だけで何とかするしかないだろう。……とはいえ、その矢もそろそろ尽きかけてきているがそれでもこれ以上近づかれるわけにはいかない、と次の矢を取ったそのとき、御者台の方から依頼主の声が飛んできた。

「町が見えたぞ！ 駆け込めば勝ちだ！ もう少し頑張れ！」

その声にシエレスの顔色が明るくなる。

町の周りには堅固な壁が張り巡らされ、門の前には屈強な衛兵が控えているのが普通だ。駆け込んでしまえばモンスターは追撃をあきらめざるを得ないし、もし諦めなかつた場合は衛兵が相手をしてくれる。

普通のモンスターが相手の場合は一直線に町を目指して駆け込む。それが一番の対処法なのだが……

「……ニレニアさん？ どうしたんですか、怖い顔して」

「ああ。……このままではまずい」

「え？ どういう事ですか？」

そう。その対処法が是とされるのは実はランクF〜Dまでのモンスターに限られる。何故なら、人の生活圏内に出てくるモンスターはほとんどがそのランクに属しているからだ。

が、何事にも例外があるように、現在この馬車を追いかけてきているのはグレーウルフが7匹。ランクCに属する灰色の狼が群れで追いかけてきている以上、このまま引き連れていくと頼りの衛兵に締め出しを食らってしまう可能性もある。そうならば守りきるのは不可能。

どうするべきか。

この馬車と、依頼主と、シエレスを守るために、やらなければならぬことはないか。

しばらく考えて、弓から矢をはずすと両方を荷物の中に戻した。代わりに押し込んでいた、荷台から身を乗り出す際にバランスを崩さないよう外しておいた愛剣を引っ張り出す。ベルトに剣を戻して要所を金属で覆う軽鎧に不備がないことを確認して、シエレスに――



言頼んでおく。

「シエレス。町について依頼人の安全が確保できたら、できるだけ早く衛兵を呼んできてくれ。頼んだぞ」

「へ？ ニーレニアさんそれどういう意味……って、ニーレニアさん!?」

返事は待たず、馬車から飛び降りる。走っている速度が速度だけに足から着地というわけにはいかなかったが、受身を取ってすぐ立ち上がることはできた。突然のことに驚いたのか速度を緩めたグレイウルフの群れをにらみつけ、剣を抜き放つ。

突然現れたこちらに警戒して、グレイウルフの群れは走るのを止めた。半円状に取り囲み、威嚇のうなり声を上げている。追いかけるか仕留めるか、迷っているようだ。

隙を消し、7匹全てを視界に入れつつ、それぞれを睨みつけていく。ジリ、と足を動かして距離を図るしぐさをすれば、グレイウルフのほうも身構える。間の空気が緊張で凍りつく。

……これで目的は達成されたも同然、あとはこの膠着状態をできる限り長引かせる。そうすれば、シエレスが衛兵を呼んできてくれるだろう。

汗が流れる程度のことでも破れてしまいそうな緊張。

「重量級汎用アーツ、其の五」

その矢先に、ソレは降ってきた。

「『アースクラッシュ』!」

「は? と空を見上げて確認する間もなかった。

そんな声が聞こえたと思った次の瞬間には、こちらとグレイウルフ

フのちょうど中間に何かが落下、地面を円形に掘り起こすほどのさまざまな衝撃波を撒き散らした。それでも威力が余ったのか、鈍くて重い音が風となって叩きつけられる。

あまりの衝撃に土煙が立ちこめ、一体何が落下してきたのかわからない。よく思い出せばさっきの声は幼い少女のものだったような気がしないでもないが……だとすれば、今のこれは何なのか。

と、思っている間に、土煙の向こうで何かの影が動いた。グレーウルフか、とも思うがそれにしては小さい。場所が何かの落下地点の辺りだから、先ほどの声の主だろうか。

「うあつちゃ、加減間違えたかなー。全部ふっ飛ばしちゃった……めんどくさー」

……間違いなく、先ほど上から聞こえた幼い少女の可愛らしい声だった。

が。その言葉の内容と、その少女らしき影の横に現れた、陥没した地面にあつてなお巨大だといえる大きさの影は何なのか。それにさっきの状況からしてあの少女らしき影は空を飛んでいなかったか？

柄にもなく疑問符を乱発していると、バサリ、という羽ばたきのような音が聞こえて再び風が巻き起こった。土煙を吹き飛ばす向きの風を顔を覆って耐えて、クリアになった視界で再び正面、空から降ってきた何者かを見る。

そこにいたのは、間違いなく少女だった。それもせいぜい10代前半だろう。流れるような漆黒の長髪には2本のラインのように白い髪が混じり、頭のとっぺんで1つになってアンテナのように立ち上がっている。

しかしその少女が身に着けているのは灰銀色の金属をしつかり使った全身鎧で、年相応に華奢な右腕を伸ばして支えているのはやはり呆れるほどに巨大な八角形の無骨な盾。

だが何より特徴的なのは、少女の背中にある片翼に1本ずつ白いラインが入った大きな漆黒の翼と、こちらもやはりラインのように白い鱗が混じる、漆黒の鱗に包まれたしなやかな尾だろう。

絶対に人間ではないその少女がふとこちらを振り向いた。髪に隠れていた左耳は鋭く尖り、先端に黒い鱗がついている。半ば予想通り人形のように整った顔にどこか挑戦的な笑みが浮かび、混じりけなしの漆黒の瞳には楽しそうな光しくない。

「おねーさん、大丈夫だったー？ “今の” 私以外無差別だから、一応距離を離して手加減しててもいくらか食らってると思うんだけどー」

その言葉にはっとして自分の状態を確かめる。が、鎧にも体にも大した傷はなく、あったのは馬車から飛び降りて受身を取った時のかすり傷だけだった。先ほどの言葉で分かった、手加減していてあの威力なのか、という言葉は飲み込んでおく。

「ああ。大丈夫だ、問題ない」

「そりゃ何より。ってことで攻撃のほうは任せていいー？ ちょっとこれじゃ狼を追い回すって訳にもいかないしー」

そう返答すると、陽だまりの様な笑顔でそう言ったのけた。

…… おそらく、さっきの衝撃波を起こした一撃は、空からあの巨大な盾を地面に叩きつけることで起こしたんだろう。翼があるから空を飛んでいても不思議ではない。が、もう一度アレをやるうとすれば、空に飛び上がる手間が必要だ。

それぐらいなら『盾』の本分である防御に徹し、身軽そうなこちらに止めを任せたほうが良いという訳か。なるほど、合理的だ。こちらとしても後ろを気にする必要がないなら、かく乱しながら仕留めることができる。

「分かった。町に行きそうな奴をはじいてくれ」  
「おけー」

改めて剣を構えなおす。その間にゆるい返答とともに少女は巨大すぎる盾の内側、円形の持ち手に両手を沿え、ごろりと横に転がすことで陥没地帯から抜け出していた。

……翼と尾があることと、耳に鱗があることから考えて、少女は竜に連なる存在なのだろう。あれは基本としてバカげているほどの怪力を持つから、この光景もおそらく日常茶飯事。彼女にとっては当たり前なのだろう。だから一々驚いてはいけない。たぶん。

何でそんな存在がこんなところに来ているのか、という疑問はひとまず置いておいて、まずはグレーウルフの群れを殲滅してしまうことにした。

四・五話 その世界に舞い降りたもの（後書き）

他者の視点から主人公の容姿を。

## 五話 幸運と町の人

「おっちゃん、1000ギルで食べ歩きのおススメおねがい」

「おっ、嬢ちゃん分かってんな！ ちょうど1000ギルだ、ほいよ」

「わぁおいしそー。おっちゃんありがとうー」

「いいってことよ。また頼むぜ！」

町の入り口でニーレニアさんという、金髪赤眼でスタイル抜群な細剣レイピア使いのおねーさんを助けてグレーウルフを追い散らしたあと、お礼を言われてごつい衛兵の控える門を素通りさせてもらった。

その後ギルドの場所とか簡単な町の紹介とか色々お役立ち情報を教えてもらったので、このイベントはやはり初心者向けの『当たり』だったのだろう。

……とかいうことを、ソースで焼いた謎肉の串焼きを頬張りながら考えつつ、門から直接続く大通りを歩く。さっきの盾は背負っても転がしても邪魔でしかないから、戦闘が終わった時点でアイテムボックスに放り込んでいた。

「感じは鳥っぽいけど味は豚っぽいという……しかし濃い目の甘辛ソースが焦げて絶妙。あの店は当たりに認定だねー」

むぐむぐと口を動かしながら歩く先は、5つの大通りが交差するこの町一番の大広場。ギルドに行くにしろ買い物に行くにしろ、とにかくあそこに行かないと話にならない。

通りを歩いている内、7割近くがエルフやドワーフに代表される亜人というある種壮観な中では、Luckとして明らかに人外な姿をしている私もすっかり溶け込んでいる。それでもちらほら視線は感じる訳だけでも、どうせ150cm程度の小さな身長で鎧を着て

いる、というのが珍しいだけだろうから気にしていない。

(……しかし、フォーの時と姿が微妙に変わってるとはねー……。やっぱり名前を変えた影響かなー)

噴水に落ちて髪を絞った時に気付いた、体のあちこちに入った白いライン。黒に白が混じるのは種族としてどうなんだ、と思いつつも、ステータスに影響があつた訳でもなかったから現在は諦めて受け入れている。

その辺の事はこれから考えよう、と串焼きの最後の肉を頬張り、肉の無くなった串を適当な角に設置してあるゴミ箱に放り込んで、その近くの売店でまたオススメを注文して食べながら進む。

……出てきた惣菜クレープ風の料理を見て、隣の売店で指を空中で動かしていた犬獣人<sup>コホルト</sup>がきよとんとしていた。たぶんプレイヤーで、ウィンドウ操作で買い物してたんだろう。

彼のようにウィンドウでも買い物はできるらしいが、こうやって話をして買い物(『Free to There』の時は自由入力での注文だったけど)するとメニュー外の食べ物も買えるから、こっちの方が便利だと思っけども。

(そっぴや、空中で指を動かすって仕草、案外目立つねー。プレイヤーの多い事多い事ー)

祭りでもあるかのような賑やかさの中、大通りに軒を連ねる屋台の数々。その隙間に開いている普通の店。そういう場所を少し見回せば、同じような仕草をするキャラクターを何人も見つける事が出来た。

(あれ?)

ふと私は、そんな仕草をしているキャラは人間が圧倒的に多い事に気がついた。さつき売店で見かけた彼はコボルトだったけど……もしかして、新規登録者はほとんど人間だったりするんだろつか。だとすれば、相変わらず運営の情報操作は鬼だと言わざるを得ない。あくまで『Free to There』での経験で言えば、人間という種族ははつきりいつて損だ。

人間の利点は成長が早く道具の使用にボーナスが付き、魔法も剣も使えて生産スキルで質の良い物ができやすいこと。まあつまり詠って斬ってハイレベルな道具を使いまくれるいわば公式チート。

……ただ、種族別隠れステータスの『気候条件耐性』というのが全種族中最低に設定されていて、ダンジョンの奥やレアな素材のある辺境、雲の上50メートル地点以上で行動不能になる。

他にも最上級範囲魔法（＝周囲の気候を一時的に変える）を撃たれば終わりだったり、『天災』と呼ばれる大型モンスターによる都市襲撃イベントに一部参加できなかつたり……要するに、行動半径が致命的に狭い、のだ。

この特性ゆえに、人間のレベルキャップは100と言われている。正規のレベルキャップが200だったから、その半分。何故ならそれを越えるとどうしても上記“行けない場所”の敵を倒さないと経験値が入らなくなるからだ。

よって、人間でスタートした人はその事が分かるまでは有頂天で無双し、越えられない壁にぶち当たって絶望する事になる。……ま、知り合いに「俺は生産専門だっ！」と言いきって、材料を他種族の仲間に取って来てもらってハイレベルな道具を売る人間プレイヤーも居たけども、それはそれで別種の覚悟が必要なので一般的ではない。

（なつかしいねー、『無双キャラ（体験版）』……しかしこんな  
にひっかかる人がいると、100まで育てて打ち止めになってもり



セットの人数が多くて第二期スタートになるかもー)

惣菜クレープ、と見せてフルーツクレープだった物の最後の一口を食べ終わり、包み紙をやっぱり適当なゴミ箱に放り込みながら軽くため息をつく。相変わらず、本当に相変わらず、このゲームの運営は性根がどうかしていると思いなから。

運営の性根が、本当の本当にかかっていると痛感するのは、そのおよそ数十分後。

## 五話 幸運と町の人（後書き）

VRなので、プレイヤーにはデフォルトで美形が多いです。

## 六話 幸運と世界の過去

3つ目の買い食い（今度は野菜サンドイッチ）を半分くらい食べた所で、私は大広場へ到着した。広場の真ん中に『オープンゲイベントはこちら』という文字と矢印が書かれた大きな看板が立っていたので、その矢印に従って路地に入る。

曲がり角ごとに立っている看板を頼りに奥へ奥へと進むと、行きついた先は町をぐるりと囲む壁。その壁の前には『この壁に沿って進む』という看板が立っていたので、指示通り矢印の方向へ壁に沿って進む。その先には、壁についた扉に向けて矢印が書いてあった。それに従って壁の中に入る。

今度もまた壁の中を、松明の明かりを頼りに歩きに歩く。どこまで湾曲する道を歩かされるのか、とうんざりした辺りで再び看板を発見。さっき入ってきたのは反対側の壁についた扉をくぐると、目の前には『お疲れ様でした』の看板が。

「やっと着いたのか……。だいぶ歩かされたけど、って、ここ塔山の登山口かー」

看板の向こうに、ほとんど断崖絶壁のように至近距離でそびえる世界最大の山を見つけて、私は現在位置を思い出した。なるほど、ここなら確かに何千人来ようと集まりきれぬ。

それにしてもわざわざあんな迷路を歩かせるような真似をしなくても、と思いつながら開けた草地へ進む。予想通りと言うか何と言うか、そこに居たのは背が高く美形な人間がほとんどだった。それ以外の種族は、ざっと見た感じ3割弱、といったところか。

人間の集団を、あーあーやらかしちゃった人があんなに……。、とか思いつつ迂回して、居心地悪そうにしている小さな集団に近づくと

「はるー」

「え、あ、こ、こんにちは」

「こんにちは」

「ちわッス」

返事をくれたのは順番に女猫獣人<sup>ケットシー</sup>、女木精霊<sup>ドリユアス</sup>、男ドワーフの3人。  
全員私より背が高い。

「ここ、オープニングイベントの会場で合ってるー？」

「合ってる……箒、ですよ。看板に書いてましたから」

「迷路だよーあの道筋」

「複雑でしたねえ」

「なんかやたらめったら人間多いねー」

「そりゃー種族補正半端無いツスもん。なんスかあの無双」

適当に会話して時間を潰していると、少し離れた所にいた女人魚<sup>マーメイド</sup>が眉を寄せるのが見えた。下半身が魚なので微妙に浮いた状態でこちらへ来る。

「あの……すみません。その装備、デモプレイで見た気がするんですけど……」

「え、ホント？」

「そういえば……」

「そっぴやきれいスね、それ」

デモプレイに映ってた？ ……おかしいな、この鎧は私の町で作られたオリジナル品でドロップじゃないんだけど。つかデモプレイって何、そんなのどのサイトにも載ってなかったんだけど？

「……っていうかあなた、デモプレイのキャラそっくり真似してま

せん？」

「ああ、そういえば居たわね。こういう装備でこういう姿で、大きな斧ハルバード振りまわしてたのが」

「ちょーい待ち。それ、本当にデモプレイ？」

どー考えてもそれ私、正確にはフォーなんですが。

「著作権侵害で訴えられ」

「いや待って、ちょっと待ってお願い。で、何個か質問していい？」

「……はあ」

キツめ美人のマーメイドさんが黙る。私はしばらく腕を組んで頭を整理すると、1つずつ確認を始めた。

「そのキャラが出てきた時って、もしかして岩だらけの場所でスケルトンとかゴーストの群れ薙ぎ払ってたー？」

「そうですね」

「他の場面で家くらいぶっ壊せそうなハンマー振りまわす巨人とか居たー？」

「居ましたよ」

「白くてでっかい鳥に乗って矢の雨降らす狐の獣人はー？」

「居ましたね」

「泣きながら範囲魔法乱発する天使はー？」

「居ましたけど」

「最後、そのデモプレイってどこで見たのー？」

「チュートリアルの後、この世界の背景として見ました」

そっか、ありがと。と小さく呟いて、私は深く深く息を吐く。なんとか立ち直って髪を後ろに払い、1つだけ決意した。

「とりあえず……管理者の奴一回全力でぶっ飛ばそう」

「「「は?」「」」

「それはさすがに違反行為になると思いますよ」

…… 4人に呆れた顔をされてしまった。

でもそう決意したってしょうがない。運営は過去、つまり『Free to There』で実際に起こった派手な戦闘を“デモプレイ”として流したからだ。でなければ私が覚えている黒歴史的戦闘や、個性的すぎる知り合いが軒並み出ている訳がない。

なので未だ私を疑っている4人の誤解を解くために『Free to There』と『Fragment of The World』が繋がっている事を説明しようと、口を開きかけた。その時、

「えー、皆さまお集まりいただき、誠にありがとうございます」

マイクか何かで、拡声された声が響き渡った。

六話 幸運と世界の過去（後書き）

区切りを短くして、ちょっと連載ペースを上げようと思います

## 七話 幸運と問答無用の暴力

響いた声に、説明を中断して塔山の方に顔を向ける。いつの間にそこに居たのか、額から生えた一本角に髪に目に服まで全てが黄色の馬っぽい人が、黄色い拡声器片手に立っていた。

思わずそちらを見る目が白けたものになってしまっが、あちらはお構いなしに拡声器を口に当てて話を始める。

「本日は『Fragment of The World』のオープニングイベント！ 及び実は諸々の事情で変更になった仕様の説明会となりまーす！」

ちよつと待て、諸々の事情って何だ。

若い男の、微妙に頭がキンキンする声で告げられた内容に、まず心の中で一言。

「えー順番としましては説明会を先にしたいと思えます！ なので皆様の動きは説明中の間だけシステムの拘束させていただきますのでご容赦ください！」

「は？」

そんな一方的な宣言に、おい、プレイヤーを拘束しないといけなようなヤバい事をやらしたのか運営。と心の中で長文を突っ込みつつ、小さな声が出たのが二言目。

「はい、オーケーですか？ ……はい、拘束完了ですね。えーではまず、ゲーム内時間についてご説明を！ 『Fragment of The World』での時間倍率は、ゲーム開始当初3倍と設定してありましたが、職員の手違いで30倍となっしてしま



いました！ そのミスに気付いたのがこのイベント開始6時間前と  
なってしまう、修正が間に合わないままとなっております。申し訳  
ございません！」

「ちよつと待て……っ!？」

案外さらつと言われた話に、一瞬頭が真っ白になった。その状態  
で思わず口から出たのが三言目。

「えー、その際運営陣も誠心誠意対策をしたのですが、他にもミス  
が見つかり……痛覚が現実の半分程もある事、一部マップデータが  
クローズドのままであること、余裕を持っていた筈の容量がNP  
Cの行動プログラムで食いつぶされている事が判明しております！」

大丈夫がこの運営。

思わず顔を引きつらせながら思ったのを最後に、もはやそれ以上  
の言葉は出なかった。

ぐだぐだ、なんていう言葉ですまされる問題ではない。一応接続  
料は払っていないとはいえ、これはVRMMO。意識をデータ世界  
に移すこのゲームのハードが病院にしか無いのは、万が一に何が起  
こってもすぐ対応できるようにするためだと言っのに。

「そこで皆様、今一度ご確認願いたいのですがぐばはっ!？」

突然、黄色い角付き馬人が、言葉の途中で変な叫びをあげて明後  
日の方向へ飛んで行った。黄色い角付き馬人、もといゲームマスタ  
ーの1人が吹っ飛んで行った方向から元居た場所に目を戻すと、立  
派な体格で紅い毛並みの狼人ワウルフが大きく息を吐いていた。身にまとう  
のは黒い革製の軽鎧、黄色いゲームマスターが飛んで行った方向を  
睨む目は金。

何であんな所にいるんだろう、と疑問に思っ、私は自分の拘束

が外れている事に気付いた。恐らくは何かを確認させるために外したんだろうが、はつきり言って油断以外の何物でもない。

「ど、どういう、事？ 今、の……」

「し、知るかよ。何か相当ヤバいっていうのは分かったけど……」  
「相当、どころじゃないわねえ……最悪、会社がコケるかも」

ため息をつきながら首を回していると、さっきの3人が不安そうに囁き合っていた。見回せば、プレイヤーは一樣に動揺している。その様子にもう一度ため息をつく、私はワーウルフの方へ何気なく歩き出した。

「ログアウトが町の中でもできなくなってる、という不具合ならもう知っているが？ 更に付け加えるならデスペナルティもその日の経験値の半分と所持品の3割から、その日の経験値の全てと所持品の8割というとても厳しい条件になっているのも確認している」

「うおい、お前初日にして死んでるってどこ行っただよ」

野性味が溢れすぎる容姿の割に格式ばったような丁寧さで話す紅いワーウルフ。その背後から、背中に鳥の翼、顔は猛禽、口は嘴、しかしその全てが空色の鳥人が声をかけた。身につけているのが動きやすさ最優先の服にしか見えない防具であることもあって、ぱっと見は細身に見える。その左手に、地面に切っ先がつきそうなくらい大きくごつい両刃剣を持っていなければ。

その2人を見て内心でだけで、おいおい早くも戦略級の2人がお怒りだよ？ と呆れてみる。が、ふとその視界の隅に不吉な姿を見た気がして、慌てて周りを見回した。

「ひ、ひどいですう……」

予想通り聞こえてきた、泣きべそかいた男の子の声に慌てて走り出す。紅いワールフと空色のハーパイがぎよつとして上空を見上げたのを確認して、アイテムボックスから装備を引っ張り出すと同時に、地面を蹴って空へ飛びだした。

ある程度の高さまで一気に飛びあがって、舞い落ちて来る虹の光沢を持つ白い羽に触れそうな位置で急停止。ちらつとだけ後ろを振り向いて初心者集団が動いていない事を確認して、町の入り口でも使った八方形の大盾、『八方守護陣盾』をつきだすように構えた。

「ちやんとつ、説明してくださあ〜い!!」

「大盾防御型アーツ其の一、『ブロック』っ!」

アーツの発動とほとんど同時、泣き怒りのような声と一緒に、シヤレにならない規模で光が爆発した。所構わず飛び散ろうとするそれを、構えた大盾を中心に展開した見えない壁で防ぎきる。

ガガガギギギギ! とマシンガンでも撃たれているかのような派手な音が響き、その衝撃で徐々に地上の方へ押し込まれる。それでも知り合い達の事がある意味で信じて耐えていると、半ば予想通り、スパコーン! という軽い音がそのさなかに響いた。

聞き覚えのある音に一息ついて、構えを解いてアーツを解除。滞空したまま大盾を足元に向けて元凶の方を見ると、金髪碧眼に真っ白い羽の少年を、黄色と黒のトラ縞猫獣<sup>ケットシー</sup>人が叩き落としている所だった。

さっきの軽い音は、トラ縞ケットシーが真っ白羽少年の頭をはたいた音らしかった。その事実をしっかり確認して、どしゃ、と地面に落ちた少年を追うように地面に降りる。

「ほんつまゴメンナサイ! この泣き虫がゴメイワクなことしたせいで!」

その場所は、ちょうどどこかおかしい口調で謝り倒しているトラ縞ケツトシーと、初心者集団の間だった。装備の重量のせいで、ダ  
ンツ！ と勢いのある着地になったのは仕方ない。私は何か言われ  
る前に先手を打つ事にして、トラ縞ケツトシーの方へしっかり構え  
たまま、ハンドルのような形の持ち手をしっかり持って、大盾本体  
に右足をかけた。

「……ん？ もしかしてこのごつつ過ぎる盾は、ふ」

あくまで何か言われる前に先手を打つ事が目的なので、言葉を途  
中でぶった切る形で、大盾にかけた右足を蹴りだした。それに合わ  
せて持ち手を手前に引っ張る。

ガコ、という音の直後、ジャギン！ という音がして、八方形  
の大盾が、その周囲に鋭い棘を無数に生やした凶悪な姿へと変わっ  
た。当然ながら地面に向いた方向にも生えているので、大盾はがっ  
しり固定された状態になる。

私はあえてジャンプで大盾の上に着地すると、並んだ棘のこつち  
から、沈黙した向こうを見下ろす姿勢で姿を現した。

「いやー、別にゲームマスター蹴り飛ばすのはむしろ参加させやが  
れって感じだから別にいいけどもー。とりあえずそのバカに、こ  
ーんなに初心者が居る所で範囲魔法ぶちかましてんじゃねーよ、っ  
て言ってももらえないかなー？」

紅空トラ白、いつの間に引きずってきたのか黄色を交えた集団に、  
その中で最小である筈の私は、何気に相当怒ってますの声で上から  
そう尋ねてみた。

七話 幸運と問答無用の暴力（後書き）

ゲームマスターが微妙な姿なのは仕様です。

## 八話 幸運と世界のルール

いきなり波乱の状態から始まったオープニングイベントは、私を含む一部『Free to There』からの引き継ぎ組によるゲームマスターの私刑<sup>リンチ</sup>が敢行された事で一時中断となった。実力差を読みとったのか、初心者集団は私が地面に突き立てた（？）『八方守護陣盾』の向こうで大人しくしている。

HPが設定されていない、つまり不死身のゲームマスターを散々ボコボコにした後、吐き出させた特別ルールは、

- ・ 時間倍率が3倍 30倍  
（現実の4時間⇨こっちで120時間⇨5日）
- ・ 痛覚の拡大。  
（現実の半分⇨現実並み）
- ・ 現実接続時間が1時間以下のログアウトが不可能。  
（こっちで30時間は過ぎさないといけない）
- ・ デスペナルティの厳格化  
（宿屋で休むまでの経験値全て&所持品の8割の消失。装備中のものは含まない）
- ・ 一部マップの気候が過酷化  
（具体的には立ち入り不可能。その気候耐性に特化した一部種族除く）
- ・ NPCの行動プログラムの異常拡大  
（プレイヤーと見分けがつかないほど人間らしくなった）

の6つ。

全身黄色ずくめの一角獣人<sup>ユニコーンマン</sup>という微妙な姿で出てきたゲームマスターはまずそのことについて頭を下げ、そこを更に一通り殴った後、本来のオープニングイベント『塔山に挑戦してみよう！』の開始と

なって、初心者集団は塔山へと繰り出していった。

自由参加だったことに加えてなぜかゲームマスターに呼び止められその場に残ったのは、見事なまでにどこかで見たようなプレイヤーばかり。つまり、『Free to There』から『Fragement of The World』へ引き継ぎをした、どう鼻屑目に見ても初心者とは呼べないベテラン集団だった。

例のシリアルコードで入手した“特典”の説明があるとのこと、残らざるを得なかったのだが……

「しかしまー、全員が全員名前を変えてるとはー……」

「そういうお前もな。それにあんな条件を見せられれば変えない方が損だろう」

大盾は仕掛けをしまつてからアイテムボックスに放り込んで、私は誰に言うともなしに呟いた。腕組みをした紅い狼人ワウルフが律儀に返答するのに「まーねー」といい加減な返事をして、食べかけだった野菜サンドイッチをアイテムボックスから取り出してパクつく。

この場に残っている引き継ぎ組みはざっと20人ほど。そのうちの8人が知り合いだというのだから、私の知り合いはどれだけ物好き比率が高いんだという話だ。

なお、この固い喋り方をする紅いワウルフの前の名前はルガード、現在はデイグニタスという。何となく厨二臭がしたので略してデイーグと呼んでもいいかと聞くと、もうその他の面々はそう呼んでいるとのこと。

「……ところでさーデイーグ」

「どっした、クー」

私の方はラック、最後の文字を取ってクーと略されている。短い名前だから略す必要ないじゃん、とも思っけども、もはやこの略

す、というのは様式美しい。とてもどうでもいい。

「向こうで馬面ゲームマスターがガサガサ用意してるアレ。何だと思うー？」

「お前……本音と建前がごちゃまぜになってるぞ。そして俺に聞くな」

しまった、ルビと本文の場所を間違えた。

しかし不吉な予感しかない……ここまで信用されない運営とはいかに。まあ、『Free to There』での所業を含めて自業自得と言うものだけだ。一部残っていた過激派プレイヤーが居たら袋叩き程度じゃ済まない所だ。ち、運のいい奴め。ゲームマスター

「あつは、クーちゃん今怖い事考えてたでしょ。僕には垂れ流しになってる毒思考が見えてるよ」

「そしてどつから湧いてきたんよ残念な二枚目参謀さんー？」

「うわお本当に毒垂れ流し状態だった？」

「うるさいなー2・8枚目鳥男ー」

「わあほとんど3枚目だ、そんな評価だったとは心外だな」

空色鳥人ハレビと軽く見えてその実剛速球の投げ合いを繰り返すのは既に恒例行事。ワイズ、というド直球な名前だった彼は、トレバックと普通なのかそうじゃないのかギリギリラインの名前になっている。略称はトーレ。

なお、先程泣きながら範囲魔法をぶちかました激レア種族、天使の少年の名前はキャンドラ リベルタ。略してリーベ。そして彼をどついで止めたトラ柄猫獣人ケットシーの彼女はサーシス ライオフ。略称ライ。言動に難はあるものの貴重な突っ込み役常識人なので私はさん付けしている。

ここまでの4人はほどこへ行くにも共に行動している。私はそこにたまたま巻き込まれる事があった縁で知り合いになった。しかし



略称がほぼ全部伸ばす音になるとは、長音大好きだな彼ら。

「しかし、準備に時間かかってんねー……。あ、無くなった。買ってきていいと思うー？」

「ダメだろうな。もう少し待ってみる」

「えー……………」

ディーグに言われて口をとがらせるだけに留めておく。敏捷値に<sup>S P D</sup>はステータスを割り振ってないから、この身の動きが鈍重なのは把握している。買いに走って戻ってきて、まだ準備が終わってなかったらここは荒れ地になっているだろう。

仕方なくため息をついて黄色いゲームマスターの方を見る。……………  
「……って、ちよつと、待て？」

「……………ディーグ」

「どうした」

「アレ、変わり身人形に見えるんだけどさー、気のせい？ どう？」

ガサガサと作業をしているゲームマスター、に見える何かを目線で指し、隣に聞いてみた。ディーグは「何？」と小さく呟いて、その金色の目を細める。その声が届いたのか、トーレも眉を動かして視線を同じくした。

「……………確かにな」

「……ってことでクーちゃん、例の、よろしく」

「言い方さえまともならもうちよつと協力的にできるんだけどねー」

ディーグの確認とトーレの合図にため息で返して、私はアイテムボックスから一枚の白紙の紙を取り出した。端はボロいながらもつきり白いその紙に、同時に取り出した細工付きで上等なインク瓶と

羽ペンを使ってざかざかと文字を書いていく。

最後に魔法陣を書いて自分の名前を署名し、インク瓶と羽ペンをアイテムボックスに戻す。そのままウィンドウ自体も閉じて、出来たばかりのスクロールを起動させた。

「スクロールLv3 『ディヴァイン見破り』」

パン、という軽い音がして、スクロールがはじけ飛んだ。広がる波紋のような光が周囲に広がり、黄色いゲームマスターの姿は出来の悪い木の人形へ、その隣の木は書類らしき紙の山を乗せた机に変わり……ゲームマスター本人の姿はどこにもない。

「まあ、ここにいるんだけど？」

「下手な演技は止めておけと言う事だ」

と思ったのも一瞬。いつの間に仕留めて、もとい捕まえてきたのか、ディーグとトーレがゲームマスターを片足ずつ掴んで引きずってきた。どうやらプレイヤーの中に混ざっていて、逃げる間もなく殴られたようだ。

「というか。いい加減に“特典”の内容を教えてほしんだけども。何十分拘束する気？」

## 八話 幸運と世界のルール（後書き）

デスゲームではなく、完全に閉じ込められた訳でもなく。

## 九話 幸運と、もう1人の幸運

「ぐすん……それでは、今から“特典”の説明会を始めたいと思います……」

わざとらしく泣きべそをかきながら、黄色のゲームマスターは書類らしき紙の束が山と積まれた机の後ろに立ってそう切り出した。プレイヤー側は顔に『早くしろ』と書いて応じる。

「……ノリ悪、いやなんでもないです。えー、とりあえずコレを配布してしまおうと思いますので、アルファベット順に呼んでいきますから、並んでおいてください……」

アルファベット順……となると、私はしだから真ん中あたりだろうか？ デイグは早そうだ。

わらわらと移動していくプレイヤーに混じって動き、周囲に頭文字を聞きながら移動していく。んん、予想通り真ん中あたり。

あの外見の割には作業が早いのか、のんびり散歩するくらいの速さで進む列。色とりどりのファイルを手に列から離れて思い思いの場所に散っていくプレイヤー達を眺めながら進み、私も似たようなファイルを受け取った。

邪魔にならないように歩き出しながら見てみると、表紙の色は黒でおおよそA4サイズ、厚さは1？弱、システムロック鍵でもかかっているのか開かない。……何だこれ？

並ぶ前に居た位置に戻ると、やっぱりデイグは先に帰ってきていた。あちらはやはり同じ大きさ同じ厚みでオレンジ色の表紙のファイルをいじっている。やはり開かないようだ。

「……なんだろねーこれ」

「分からん」

「ううん、これはさすがの僕も中身を見ないと分からないかな」

そんなことを言っていると、トーレも戻ってきた。その手にはやはり以下同文、表紙の色だけが違うファイルがあった。その色は空色に白の縦縞。

これで3人分のファイルが揃った訳で、どうやら単色だけではならしいと分かったくらい。しかしどこかで見た事があるような色と模様をしている……気がする。

「……ライさんとリーベはどんなだったー？」

「ライさんは三毛柄、リーベは真っ白だったけど……あれえ？」

トーレは何かに気付いたようだ。

「……ディーグがオレンジ、僕が空色白縞、クーちゃんが真っ黒」

「……待て。どこかで聞いたような色の組み合わせだが」

「っーことは……何？ まーたあのゲームマスター勝手に過去をねつ造してくれちゃった訳ー？」

続く言葉でディーグと私も気づいた。

「うう……えーでは、そのファイルの中身を説明したいと思います……。えーと、システムロック、解除、と……」

そんな風に不吉な予感を感じている間にゲームマスターの次の行動。私たちは一度目を見合わせて、恐る恐るファイルを開いた。

そして1ページ目に、嫌な予感通りの姿があって空気が凍る。その間に続くゲームマスターの声。

「えーと、もうご覧かと思いますが、そのファイルは皆様の前キャラのプロフィールとなっております。基本の職種は前作で皆様が作った“町”の長で共通となっております、性格その他は皆様のプレイ履歴と運営陣の独断偏見で形になっていま」

ゴツ、と鈍い音がして、黄色いゲームマスターは沈黙した。大方耐え切れなくなったプレイヤーの誰かが打撃気絶系のアーツでも発動したんだろう。

……しかし、これは、は………っ！

「……ねー、2人とも。『プレイヤーから見た関係』って、何だった？」

「………従弟いとこだそうだ」

「僕の方は幼馴染だつてさ。こんな瓜二つなのにねえ？」

「……あの〜、同い年の甥こやしつて………」

「コツチも幼馴染やつて。でもなんやろ、不吉な気配がすんねんけど」

「………いーじゃんまだ無難な方でさー………」

内心は、やりやがったあの運営、と、確かにハマってる！ といふ気持ちでごちゃごちゃになっているまま、行動として深いため息を吐いて私はそれに感想を投げる。

その行動に不審を覚えたらしいディーグは、その不信感のまま聞いてきた。

「そういうクーのフォーはどうなんだ」

残念ながら、それに答えるのには数秒を要したが……

「……………」と

「へ？」

「だから……………」の……………」

「何何？ 聞こえない、もうちょっとはつきり言ってよクーちゃん」

トールが何故か楽しそうに聞いてくる。この野郎、人の反応で遊んでるんじゃないよ自分のキャラが無難極まりないところだったからって……………！

その怒りのままに言ってしまふ事にして、私は腹に力を込めた。勢いに任せて声を張る。

「だから……………つ、父親違いの、妹！」

つまり他の4人と違い、直接血が繋がっているのだ。幼少期の思い出とか聞かれたら答えようがないと言うのに、運営は何を考えてこんな『関係』を……………！ いや、フォーが妹とか、すごく可愛すぎて困るぐらい嬉しいけどってだから余計に複雑だっつ…！！

「妹……………」

「あっはははは！ 妹！ なるほど、運営はよく分かってるね！」

トールは予想通り爆笑。ディীগですら獣そのものの口元がひくひくと震えている。リーベはあっけに取られ、ライは背中を震わせながらお腹を抱えて丸くなっている。

ああもう分かっていると！ 自分の判断とは別にキャラの言動を選べるからってわざわざその姿に似合いの純真で可愛い妹そのものの言動を取らせたのは確かに私だよ！ 可愛らしく喋る彼女を

ブラウザ越しで見てニヨニヨしてたさ！ だからって普通こんな形で返すか運営の奴らぁー っ！！

思わず感情のまま手に力を入れると、ベキ、と乾いた音がした。ふと手元を見ると、ファイルの表紙に使われていた、相当頑丈な筈の不思議金属素材にヒビが入っている。ぴたりと止む笑い声に、私も頭が冷えた。

「……この場合、何かモノ申したい場合は、運営に言うべきだよなー？」

「ああ……。あそこで伸びているが」

「ん、ちよつと叩き起こしてくるー」

アイテムボックスを開いて、そこにファイルを放り込む。代わりに取り出したのはさつき使っていた『八方守護陣盾』より、長さだけでいえば更に巨大なシロモノだった。単一の黒っぽい金属で出来たそれは、長い長い柄の先に、斧、槍、槌、鉤を組み合わせた凶暴な斧頭を持ち、その反対の先には鎖が続いて、私の拳二つ分ほどの直系の金属球が下がっている。

これこそ、イベント前に話した初心者アンデの4人が言っていた、不死者類ソッドのモンスターを薙ぎ払っていた、凶悪きわまる斧槍ハルバード『マルチキラー』だ。扱いなれない内は金属球で自分もダメージを受けていたが、使いこなせるようになってからは凶悪さを一段と増した。

先程の盾と打って変わって攻撃的な装備に、4人だけでなく周囲のプレイヤー全員が距離を取る。そんな中私は距離を測りながら歩いて足を止めると、斧頭に使われている内、槌をゲームマスターに向けて、大きく振りかぶった。

「重量級汎用型アーツ其の一、」



まだ気絶から回復していないゲームマスターに狙いを定め、他のゲームで言う所のスキルである、アーツ起動のセリフを言い放った。

「『チャージクラッシュ』」

さっきゲームマスターが気絶させられた時の音と比べ相当に重い音が響いて、空になった机とゲームマスター（だったもの）を心にクレーターが出来た。

九話 幸運と、もう1人の幸運（後書き）

ノリの良い運営+ちよつと懲りすぎたロールプレイカオス混沌

## 十話 幸運と描かれた過去

まあ、そんなこんなと色々あり過ぎた特典の説明も終了して、引き継ぎ組は三々五々散って行った。何をどうしようが明日の夕方まではこの世界にいなければならない訳だし、運営が変な所でノリが良すぎるのは既に全員知っている。

それならいつそ楽しんでしまった方がいい、と、私自身も早々に決断し、潰れたゲームマスターを放置して『始まりの町』を散策する事にした。

ちなみにデイーグ達4人とは別行動。いつまでも一緒に居るとライさんともどもフォローに疲れ切ってしまう。まとめ役に見えるデイーグはその実戦闘以外では役に立たないのだ。あそこまで風格を漂わせておきながらなんでもかかって理由は、その正体が戦闘狂だから。そんな訳で、現在私が何をしているかと言うと、

「おばーちゃん、落としたハンカチってこれで合ってるー？」

「おお、これだよ。ありがとうねえ」

「いいよー、もう無くしちゃだめだよー」

町の中で発生するミニクエストをちまちまこなしていた。初級ポーションをもらったりお小遣いをもらったり穴場を教えてもらったり、まるつきり初心者向けだが気にしない。

……けど、そろそろ現実逃避は止めにしておくべきかもしれない。

「さて……腹を括って見ますかー……」

大通りから少しだけ路地に入り、人気のない所で壁に背を預けてため息をひとつ。ウィンドウを呼びだして、放り込みっぱなしだった1つのアイテムを取りだした。

表紙が真っ黒な、例のファイル。

これからこの世界で過ごす時間を考えれば、自分の（正確にはフォーの）町に帰らない、という選択肢は無い。ということとはつまり、その長であるフォーと顔を合わせずに済む訳が無く。出会いに備えて少しでも事前情報を得ようと思えば、今手にあるこのファイルを見るしかない訳で。

……いくら自分の恥ずかしい系黒歴史なフォーへの愛に溢れている報告書だったとしても、避けて通る訳にはいかないのだ。十中八九、運営陣によって脚色されまくっていて恥ずかしさ数倍だったとしても、読まない、という選択肢は、無い。

「……………よし」

何度か深呼吸を繰り返して気を落ち着け、覚悟を決めて私は黒いファイルを開いた。

見なれたフォーの顔写真と名前、属性、種族、レベル、といった普通の物から並んでいる文字に目を通していく。途中、プレイヤーからみた関係、の項目で目が止まるのを、何とか引き剥がして次へ。ぺらりとページをめくって読み進めると、今度は使ってきた武器の経歴や、ダンジョン突破なんかの戦歴といった、フォーの歴史とでも言うべきものが並んでいた。その中のいくつかに顔をしかめそうになるのを、何とか口の端の引きつりにとどめて進んでいく。

もう一枚ページをめくる。……今度は、私の知らないフォーの歴史。つまり『Free to There』を開始する前、真正正銘Fortunaの過去だった。

「……………確かに、あのユニークスキルはチート気味だと思ったけども……………」

読み進めるうちにそんな呟きが零れる。

Fortunaの種族は黒竜。何のひねりもなく闇属性のドラゴンで、普段は半人半竜の姿をしているがぶち切れた時や死にそうになった時はその本来の姿で『暴走』することが何度かあったので、そっちの姿も知っている。……その時の戦闘力も半端じゃないと言  
う事もよく知っている。

このファイルによると、Fortunaことフォーは黒竜の直系、所謂お姫様に当たる血筋だったようだ。現在の黒竜王、その姉が母親となっている。ということはつまり、その父違いの姉であるLuc

ckも私もお姫様に当たると言う事か。……実感がわかない。

ちなみに、王位争いとかそういうのは既に現黒竜王に立派な息子がいるので全く関係無し。いささか以上に放任主義なため、自由な冒険者ライフに支障はないようだ。フォーも私も。

「しかしお姫様で妹で愛らしくて最強とか、どこのチートモノ小説の主人公ですか私の妹はー？ 運営陣、ここまで凝らんでもよいだろーに」

そう独り言を呟いてページをめくる。そこにはフォーの趣味嗜好等、性格的なものが並んでいた。とりあえず何度か読み返して丸暗記する。……いやだって、可愛がってる妹の好みを知らないのはどうかと思うよ？ 姉として。……あ、今気付いたけどすっかりその気になっている。

さて、と次のページをめくった。

そこには、フォーから見た私の色々な事がびっしり書かれていた。

「つつ！？」

思わずあげそうになった叫びを思いつきり奥歯を噛みしめてこらえる。ぱたん、と一度ファイルを閉じて、顔を伏せて何度か深呼吸

を繰り返した。

……何だか、今、人格が崩壊する位の破壊力を秘めた言葉が、目に入ったような、気が……

もう一度ファイルを開くのが非常に恐ろしかった。……が、相手から見たこちらの印象は、人間関係においてとても重要な要素。これを省くと難易度がいきなり跳ね上がる。

しばらくの間、両手でファイルを持ったまま真剣に考えた。読むべきか読まざるべきか、場所を変えるかこのままか。

体感時間でかなり長い時間考えて、私はファイルを手を持ったまま、小さく呟いた。

「……………宿屋入って、遮音魔法多重発動した上で、読もう」

十話 幸運と描かれた過去（後書き）

ヒント。フォーがクーを呼ぶ言葉は、とても可愛らしいです。

……そしてそろそろ更新ペースが落ちます；

## 十一話 幸運と騒がしい旅路

私の妹は、かなりのおねーちゃんっ娘だったようです。つまり、シスコン。

……いきなり何を言っているんだと思わないでいただきたい。あのファイルには、フォー自身にとってどれだけ姉が大事な存在かがびっしり書かれていたのだ。自分でも、よく小一時間で復活できたなど思うくらいに。……あれ、もしかして私だって重度のシスコンですか？ そうですか。それにしても私はさつきから誰に話しかけているんだらう。

あのファイルの残りのページにはフォーの町の状態が並んでいた。見慣れたものから目新しいものまで、やはり時間は経っていたんだなど実感。……よく見たら、『Free to There』の時から100年経ってた。そりゃ変わりもする。

「……もしかして、『種族ランクアップ』クエストって、この時間を見越してのクエストだったり……？」

思わず独り言がこぼれる。

『種族ランクアップ』クエスト。受けられるのは一回きり、そのクエスト専用の特殊なダンジョンに潜って何かするクエストだと聞いている。その報酬はステータスの上限上昇だった訳だが……その受注可能レベルが150で、私は達していなかったから受けていなかった。

なお、種族ランクアップに成功したディーグ達の話では、キャラの種族説明に変化があったらしい。何とかロードとかハイなんとかという特殊なものになり、設定上の寿命が異様に伸びたとかなんとか。



なお、私の種族はフォーと同じく黒竜なので（後ろになぜか（？）とついていたけど。白いラインに関係ある？）、最初からアホみたいに長い寿命が設定されている。100年時間がたつてもなんら問題ない。

ま、その時の種族の寿命というのはただの設定であつたため、「運営も芸が細かいなあ」くらいにしか思っていなかったが……もしそれが意図してのものだった場合、「Free to The World」は、最初から「Fragment of The World」の前身として、それこそプロローグとして開発されたことになる。

「……うーん、何だか嫌な予感……」

もしかしたら、今回オープニングで起こつたこの不手際も、何らかの意図があつてのものではないか。ついそんな考えが浮かんで、頭をふつて振り払つた。

ついでにアイテムボックスからスクロールを1つ取り出して、正面に向けて発動。

「スクロールLv3 『風の槌』」  
ウインドストライク

ドゴン！ という音で撃ち出された風の砲弾は、私へ連携を組んで襲いかかろうとしていたグラスウルフを、4匹まとめて吹き飛ばした。犬っぽい悲鳴を上げて遠くに飛んでいく草色の小さな狼x4。

それを追撃するように矢が5本飛んでいき……刺さつたのはたった1本。どー考えても命中率がおかしい。

「まとめ撃ちは格好いいけどさー……命中率考えないと赤字だよー？」

「大丈夫デス！ 後で回収しますから！」

そーいう話じゃないと突っ込みたい。

なお、今の微妙にカタコトな返事がさつき矢を放った本人。種族はエルフで、名前は……なんだったか。とりあえず、町でふらふらしていた私を捕まえて、クエストの手伝いを土下座してきた潔い子だ。身長は私より高いけども。

ちなみにクエストはごく簡単な荷馬車の護衛。お決まりとして草原のモンスターに何度か襲われるのを撃退すれば、荷馬車の目的地まで移動するのが楽になるというクエストで、飛行手段を持たないキャラクターに人気のクエストだ。

「知ってるとは思っけどー……矢の耐久度ってかなりしょぼいからー、敵どころか地面に当たっても砕けることが多いよー。特に初めの内の、初心者用のはさー」

「何デスとっ!?!」

一応、という感じで言った一言に、体ごとぐりんと振り返って驚愕の声を上げる初心者エルフ。その背後からグラスウルフが飛び掛る。

「スクロールLv3 『グラビティ過重力』」

その牙が届く前に私は用意しておいたスクロールを発動。攻撃対象は念のためにパーティを組んでおいた初心者エルフと私以外になるので、特に狙わなくても不意打ちが成功しそうだったグラスウルフだけに発動した。ギャンツ、と地面に叩きつけられたグラスウルフの悲鳴を聞いて、慌てて再び弓を構える初心者エルフ。

「まだまだだねー……」

思わず先のことを考えてため息をついてしまった。

レベルが80を越えると、即死攻撃持ちのモンスターがさりげなく現れるようになる。うっかり気を抜けば背後から首チョンパで、ボス部屋の前であろうと町まで逆戻りなんてこともありうるのだ。本当に気が抜けない。おかげでフィールドに出ると周囲を常に気にする癖がついてしまった。

ま、それは置いておいて、と。

新しくスクロールを取り出して狙いをつける。9匹いる群れの内、一番奥に下がって大きく息を吸い込んだ一匹。

「スクロールLv2 『<sup>フレイムアロー</sup>火矢』」

スクロールは一本の炎でできた矢になって、遠吠えをあげようとしたグラスウルフののに突き刺さった。仲間を呼び寄せるウルフ系固有スキル『遠吠え』は失敗。そのまま小さな狼は燃え上がり、しばらくして黒焦げになって沈黙した。あの死体に触れて「サメルン」と唱えれば素材とお金が回収できるようだ。

しかし……うん。ぶつちやけ私が戦闘に入るとお話にならない。やっぱり手を出すのは極力やめてあの初心者エルフに仕留めさせよう。経験値的な意味でも。時間がかかってしょうがないけども。

（行く方向が一緒だからって、ちよつと簡単に引き受けすぎたかなー）

退屈だ、と思いながら心の中でそう呟く。

荷馬車の目的地。その先、奥地へ入ったところに、フォーの町はひっそりと存在する。別に空を飛んでもよかったのだが、まあちよつと手間は増えるけどのんびり行くかー、と安請け合いましたのだった。

……うん。これからは気をつけようと思う。

なお、グラスウルフは護衛すべき馬車も攻撃対象とする。  
が、被害が出ることはありえない。むろん、初心者エルフが能力の大半を回して守ってるとかそんな設定ではない。

でんつ！ と、荷馬車を覆うように地面に突き立っている、棘が周囲に飛び出るギミック発動済みの『八方守護陣盾』。スクロールLv1『<sup>ブレイク</sup>警戒』とスクロールLv2『<sup>スケアー</sup>恐怖』を重ねがけしている現在、この辺のモンスターでは近寄りすらできない防壁となっていた。

十一話 幸運と騒がしい旅路（後書き）

まだ初心者用マップです。

## 十二話 幸運と旅路の先（前書き）

お気に入り100、ユニーク6、000、PV25、000、突破

……！

ありがとうございます……！

## 十二話 幸運と旅路の先

荷馬車を護衛する事ほぼ半日。本来なら2時間程の筈の道のりを終えて着いたのは、どちらかという和田舎風の村だった。周りには木の柵が巡らしてあるだけの、シンプルと言うか粗末と言うか、若干こころもとない防御体勢だ。入り口に誰かが立っている事もない。

「？」

……微妙に違和感を覚える。確かこの辺りは、ダンジョンが近いのもあってかなり防御が固かった筈だ。自警団の1人も見かけないと言うのはどういうことだろうか。

石造りの防壁こそなかったものの、巡回しているNPC自警団の強さは半端じゃなかったから、うっかり手を出してしまったプレイヤーがボッコボコにされているのを何度も見た事がある。大体3人くらいの集団で巡回している彼らは、村の入り口に誰かくれば迎えに来てくれる筈だ。

「あーやっとな着いた……ありがとうございましたデス！」

「んー大した事としてないし、別にいいよー。でもこの辺のは強いから気をつけてねー」

初心者エルフに返事をして、私は村の中へと足を向けた。いくらかはギルドの倉庫から持ってきたとはいえ、1人でこの先のフィールドを突破するには若干無理がある。ポーション類は自作するとしても、その他材料類は買い込んでおく必要があった。

……いやまあ、途中で拾ったり採集したりしても集められるんだけどさ。流石にこの先はその余裕が無いんだよね。ていうか呑気にそんなことしてたらあつという間に一撃死。もしくは物量で圧殺さ

れる。

「一応言っておくと、ここまでの武装と準備が必要な場所に町をつくるプレイヤーはほとんどいない。私だって建てた時は正気を疑われた。理論立ててしっかり説明したら大半は納得してくれたけれども。」

「おっじさーん、空ビンとか薪とかあるー？」

「あるけど、お嬢ちゃんそんな物どうするんだい？」

「あつははー、私、こー見えても生産スキル持ちだからー」

「へえ、そうなのかい？ そりゃすごい。つてことはまとめ買いの方がいいか？」

「できればお願いー！。んーと、160個ずつぐらい欲しいんだけどー」

「……………そりやまた一気に買って行くなあ」

NPC売店のおじさん（コボルト）に若干呆れられながらも材料GET。全部アイテムボックスに放り込んで店を出て、村に入った時とは逆方向の入り口に足を向ける。

……………あれ？ さっきの入り口と比べて、何だかやたら物々しいよ？ 自警団ばい武装した人がどー見ても10人以上いんですけ

「どー……………つて、あり？ こんなとこで何やってんのリグル」

思考の途中で見えた姿に、つい声が出てしまった。声が届いたのか、不思議そうに振り向いた彼の身長はおおよそ40？。背中の透き通った緑色の4枚の羽からも分かるように、れっきとした妖精だ。上の方で一つにまとめた長い緑の髪が振りむきに合わせて流れる。右手にはその体の大きさに合わせた本を携え、左の腰にはやはりミニマムサイズの杖が携行されている。着ているのは彼のサイズに合わせた葉っぱ製の軽鎧。



名前はリグルリス・ドルス。『Free to There』時代に、私の町の守衛軍（まあ、自警団みたいなもの）の1人として雇用した覚えがある。いやしかし、ちゃんと目の前に居るのを見ると感動するなあ。うる覚えの彼でこれならフォーにあった時、私どうなるんだろう。人格崩壊しないように気をつけないと。

そんな事を考えている間に、リグルは私の事をすっかり認識していた。その顔が最初の不思議そうな物からぎよつとした感じになり、驚愕の顔になった後ふるふる震えだすオプション付きで感激のソレに。

「ら、ら、ら……ラック様ああああ!!」

ちよつと待て、様って何だ。

十二話 幸運と旅路の先（後書き）

いきなりあんな風に呼ばれると驚きますよね。

### 十三話 幸運と妖精の事情

「っせあああっ！！」

半ば力任せに『マルチキラー』を大振りして、周囲から飛びかかろうとしてきたブラックウルフ（グレーウルフの上位で黒い）を纏めて薙ぎ払った。一回転した後、切っ先の方に居たグリーンスライム（有名な緑色で核のある粘性体）を叩きつぶす。その反動で跳ね上がった鉄球は、背後から近づいていたベアービー（やたらでつかくて黒い蜂）の胴体にめり込み、吹っ飛ばしていた。

「ぶ……っ！」

左手を柄の中程に動かして体をひねり、空中で気絶していたベアービーを斧の部分で両断。ジャララララ、と鎖が立てる音を追うように右足で一歩前に踏み込んで、ニヨキニヨキと生えてきたダークマシュー（子供サイズの紫色のキノコ）を3本一気に薙ぎ払う。

ギイイツ！ と背後で鉄球に潰された新手のベアービーが悲鳴を上げるのを余所に、一度『マルチキラー』を抱え込むように引き寄せる。狙いをつけ、左足で一歩踏み込むと同時に、槍の部分で正面に突きを放った。

「っただあ！」

アケファロス（乳首が目でへそが口の首なし巨人）の眉間と心臓が重なる場所、唯一の弱点へと槍の部分が丸々埋まる。そのまま力任せに上へと切り裂き、追撃として右から斧の刃で一闪、そのまま一回転してダメ押しのとどめで鉄球を傷に叩きこむ。

大物が倒されたことで周囲のモンスターに動揺のようなものが広

がった。間髪をいれずその場で『マルチキラー』を二回転させる。上空地上問わずモンスターが一掃された所で、私はスクロールを取りだした。

「スクロールLv4『シャインングレイン光の弾幕』！」

左手で上向きに発動させたスクロールは、一瞬光ると上空へ舞い上がった。すぐさまそれは白い光の弾丸となって文字通り雨のように周囲を蹂躞する。ざっと巡らせた視線で雑魚がだいぶ減ったのを確認して、『マルチキラー』を右手一本に持ち替えると私は前へ飛び出した。

そのかなり後ろから付いてくる気配を視界の端に開いたマップで確認する。同時に進む先にモンスターの反応が山ほど湧いて来たのを確認して、思わず独り言がこぼれた。

「まったく、相つ変わらずキリが無いいたらありやしないなもー。つかむしろ、湧く数と種類が豊富になっていません、かつ!？」

最後の一言で、正面に出てきた通常の倍ほどあるグリーンスライムを、振りかぶった槌の部分で叩きつぶした。この短時間ですっかり慣れた連続攻撃で周囲のモンスターを薙ぎ払う。切ろうが潰そうが殴ろうが、次から次へと湧いてくるモンスター。

それを『マルチキラー』と高レベルスクロールで全滅させては少し進み、また全滅させては少し進み、というのを繰り返して、今で30分ぐらい経っただろうか。

こんな無茶苦茶を通すことになった原因は、あの村でのリグルの話だった。

盛大にはた迷惑な内容の叫びをあげたりグルの声は当然ながら周囲の兵士というか……リグルの部隊の隊員にも1人残らず届き、全員が全員私の方をぎよっとして振り向いた。それが見る間に隊長であるリグルと同じ驚き喜びな顔に変わるまでさして時間はかからず、仲の良い事に全員が全員、全く同じタイミングで口を開いて、

「ちょっと周囲確認して黙ってみようかー魔法遊撃隊？」  
ルテニウス

私はその言葉が出る前に、腕組みをして言葉で制した。

……まあ、当然と言うか何と言うか、彼らは私が『Freet o There』にて、町を防衛する為に編成した部隊の1つ。部隊の名前は元素記号表から。

機動力のある呪文スベルを唱える系統で攻撃型の魔法使いばかりを集めて、あつちこつちから魔法を乱発させる為に作った部隊で、混戦にさえ持ち込んでしまえば凶悪な威力を発揮した。魔法のヒットアンドアウェイが成功するとあそこまで殲滅速度は上がるもんなのねーあつはつはー、みたいな。

さて問題は、そんな彼らが何でフォーの町を離れているか、という事だ。正直、厄介事の気配しかないけども。あと、私の扱ルいてどうなってるの？

「す、すみませんラック様。しかし、100年も何の連絡もなくどこへ行っておられたのですか？フォー様も大変心配されておりましたが」

「……いや、うん。様付けとか敬語とか使わなくていいしー。敬語外せないなら、せめて様を外してほしいかなー」

「はあ……。全く、相変わらず何と言うか……。……もうちょっと威厳を持ってくださいと」

……どーやら、素のまままで問題ないようだった。呆れられたが、

何か呆れ慣れている感じがあるのできつと問題ない。

「私の事とかはまー置いて……何があつたのよ？ リグルが町離れるとかさー、どー考えても大変なことになってるよね？」

「フォー様と一緒に後で聞かせてもらいますよ。で、町の様子ですが……よく分からないんです」

「はい？」

思わず聞き返してしまふ。

おつかしーなー、魔法遊撃隊は攻撃型の集団とは言え、仮にも魔法使いの集団だから拠点帰還魔法の『ポータルバツク』は全員覚えたる筈だし、隊長のリグルは部隊を丸ごと好きな場所に転移させる『グループテレポート』も修得してる筈なんだけど。

確かにフォーの町には中から攻められるのを防ぐために転移を妨害する結界も張れるようにはなってるけど、装備を見る限り、全員その結界を素通りできるパスアイテムは装備したままだ。特に魔力切れしてるといふ訳でもなさそうなんだから、誰か1人帰って部隊内通信で状況を報告すればいいんじゃないかなーか。

っていふ事を素直に言ってみると。

「いえ……実は数十年ほど前から、森を越えるように働く魔力は無効化されるようになってしまったのです。帰るうにも、この森を半分は突破しなければ魔法が弾かれてしまつて……」

そんな言葉が申し訳なさそうに返ってきた。

「なー、確かに魔法遊撃隊だけじゃこの森はきついかなー。木を片っ端から薙ぎ払って行くならまだなんとかなるかもって可能性があるけどー、普通に通ろうと思つたらせめて盾剣汎動隊あたりが一緒に居ないと無理かなー」

「……というのは分かっていたので、今回町を訪れた商隊の護衛には私達と大盾守護隊ニコロウムの2隊で付いていたんです」

出てくる部隊名は大体役割そのままなので特に深くも考えず。その部隊の隊長の顔なんかを思い出しつつ、何だか不自然に言葉を切ったリグルを首をかしげて見つめてみる。

でもって、何だか沈黙がやたら長い上に、目線をそらしっぱなしなのに気づいて、気持ち目を細めてちよっと声も落として、自分内最悪の予想を口にしてみた。

「……………リグル。まさかとは思うけども 何かの手違いで、大盾守護隊ニコロウムを背後から吹っ飛ばしちゃった、とかいうオチじゃないでしょーねー？」

「……………すみません。その、まさかです」

最悪の予想、ビンゴ。

……………正直に言って頭が痛い。いくら防御力だけで言えば町にいる全部隊の中で1・2を争う部隊だって言っても、あくまで盾は盾であって鎧ではない。守るべき背後から火力に特化した魔法をぶつけられれば文字通り蒸発してしまう。

でもって、いくら機動力があるといったって魔法遊撃隊ルテニウスはあくまで魔法使いの部隊。前衛無しであるの森を半分とはいえ突破するのは無理があるを通り越して無謀だ。まさか本気で森を薙ぎ払う訳にはいかないし。

真正正銘最悪の状況で手詰まりになっている訳だったが、そもそも私が何でこの状況が予想できたかって言うと、このリグルリス・ドルスという妖精は、昔からたまにこういう致命的なミスをやらかしてきたっていう悪い意味での実績があるからだったりする。

ただ、実績があつて要注意のままだったにしても……………やらかすか、こういうどうしようもない状況で。

とりあえず、私は気持ちを切り替える為に深々とため息をついた。リグルが若干びくついていたもののそれを無視して、髪を左手で後ろに払って言い切った。

「まーいや。私もどーせ今からこの森突っ切るつもりだったしー……。一緒だから代わりに雑ぎ払う役を私がやるわー。魔法遊撃隊ルテニウスは後ろから付いてくるだけでいいよー。それに町で何かあったら困るから、魔力はギリギリまで温存してほしいしー？」

そんな訳で、冒頭に戻る。



十三話 幸運と妖精の事情（後書き）

……あれ、何だか一話が長くなってきてる……？

### 十三・五話 黒き翼が待ち続けるもの

「魔法遊撃隊ルテニウスが、森の向こうで帰ってこれなくなっただんですか？」

「もう強制帰還した医務室の大盾守護隊ニコロウムに確認済。今度もまたリグルの照準ミスが致命傷」

「ま、またですか、リグルさん……」

報告を受けて、うーん、と頭を抱える人物が1人。報告した方のため息をついて、やれやれと呟いた。

「この肝心な時にアレの手綱を取れるあいつは行方不明。……それ以前に問題を起こしているのはアレ以外にも多数」

「連絡も取れないですし……。よっぽどの秘境か、もしかしたら『眠り』についているのかも知れない、ですけど」

ばさつと取り出したのは多数の被害報告書。ドサリ、と仕事机に積み上がった新たな紙の山に、うう、と情けない声が零れた。が、それを積み上げた方は眼光鋭く睨み返すだけで何を言うでもなく。はぁ、と小さくため息を零して、紙の山に受け手の手が伸ばされる。が、ドン、という鈍い音が響くと同時、紙の山はわずかに崩れて届かなかった。だが手の主がそれを追いかける事は無く、既に身軽な動きで部屋の外へ飛び出している。沈みかけた日の光に照らされた黒い長髪が名残りのように扉の向こうでなびくと、もう足音は遠くまでいってしまっていた。

「相変わらず有事の際には真つ先に先陣へ突貫……。全く分かってない、あいつが整えた過剰なほどの戦力の本当の意味。それと、現在この町の最高戦力は誰か」

ため息をつくのは残された1人。彼は、ブラウンのショートストリートとその上にピンと立っている犬耳を振り、ダークグレーの目に呆れの色を浮かべて、開放たれたままの扉を見送った。

燕尾服を着こなす身長は160程とやや小柄、体格も全体にすらりと細く、腰でくるりと丸まっているブラウンでふわふわの尻尾を合わせるとメイド服の方が似合いそうな美少年である。

彼はとりあえず机上の紙の山を整えると、部屋から出て扉を閉めた。廊下ですれ違った鎧姿の兵士に一言一言何かを言って、さつき飛び出した姿を追って走り出した。

「……それにしても、本当に一体あいつは何処？　こんなに長い間町もマスターも放置していくのは前代未聞。まさか、また何か遙かに大変な事に巻き込まれて奮戦中？」

そんな事を、ほとんど風のような速さで駆けながら呟く彼の名はグラキア・リボラス。立場も実力もこの町の次点最高権力者で、この町の主に仕事をさせたりフォローしたり、他の町と交渉する事がメインの仕事となっている。

そしてもちろん、部屋を飛び出したのは黒髪黒目、黒翼黒尾と黒づくめの半竜少女fortuna、通称フォー。自身の黒と対比しているような真っ白いドレスアーマーに身を包んだ身長145？の彼女は目を閉じていても歩ける城内をあっという間に飛びだし、先程の音の原因　町の周囲を囲む、高い石の防壁へと到着していた。だん！　と石畳の地面を蹴ると同時に翼を広げ、フォーは一息に城壁の上まで飛び上がる。そのまま城壁の上を走って元凶を見つけると、アイテムボックスから巨大な円形の盾を取り出して飛び降りた。

「重量級汎用アーツ其の五、『アースクラッシュ』！」

なお当然ながら姉LUCKと同様に、フォーはどれほど細く可憐に見えても生粋のパワーファイターである。やはりこちらも当然ながら、覚えていたスキルやアーツも全く同じ。当然ながら、最低でも同じだけの威力は出る訳で。

「っちよ、マスター待ってオレらまだ下がりきれてねーんですけどー!?」

「グーは何やってんだあああああー!!」

落下地点でクリティカルヒットが出たモンスター以外にも、被害が出る事多数。防御に当たっていた部隊の隊員から悲鳴が上がる。その中には病み上がりの大盾守護隊ニコロブムも何人が混ざっていて、彼らは「またか!!」という感じで前方へと弾き飛ばされていた。ちなみに、悲鳴に混じる『グー』というのは、お目付役のグラキアの事である。

その悲鳴を聞いて、やっとフォーは自分が作り出した惨状に気付いた。

「ああっ！ご、ごめんなさいっ！」

「そう思うんならせめて大盾守護隊ニコロブムの奴らだけでも拾ってやってくださいっ！」

「あいつら今回だけで背後から吹っ飛ばされるの2回目ですよ!？」  
「いやっ、むしろフォーさんはそのまま防御しててください回収はこっちでやりますから!!」

次々言われる言葉にあわあわと慌てながらも、フォーは最後の言葉の通り、森から飛び出してくるモンスター群に対する防御に専念

する事にした。

ひとまずこの町最強の立ち位置が決まったことで、陣形を組み直す部隊の面々。その動きを後ろにモンスターを前に、フォーは小さくこつ呟いた。

「おねーちゃん、一体、いつになったら帰って来てくれるんですか……?」

十三・五話 黒き翼が待ち続けるもの（後書き）

クーことLUCKが帰ってくるほんのちょっと前の話。

## 十四話 幸運と現れたモノ

「ふう……やっとうこうが見えてきたかー。ったく、どの辺に来たか分からないってのも問題よねー」

また1つ湧いてきたモンスターの群れを殲滅し、私は『マルチキラ』を一度肩に担いで息をついた。視線の先では、木々の向こうにずいぶん明るい光が見えている。

そう。この広大な森を半分まで突破すれば魔法で帰れる、と思っていたのだが、残念なことにその半分の距離の場所が分からなかったのだ。仕方なしに突破を続行。さすがにしんどいので魔法遊撃隊ルテニウスにも手伝ってもらって、どうにかこうにか現在地点まで来た、という訳だ。

「にしてもさー、リグル。さすがにコレはエンカウントし過ぎだと思っただけどー、その辺どう思うー？」

「へ？ ……そういえば、そうですね。大盾守護隊ニコロムと共に護衛で通った時はここまでの事はありませんでしたし」

「だよー」

少し上空から全体を見回し、指揮をとっていたリグルが私の声に反応して振り向いた。私が普通めに同意で答えると、すぐ別の方向を向いて指示を飛ばす。

その羽のある小さな背中を見ながら、私はアイテムボックスから体力回復ポーションを取り出して疲れのまま言う。

「いやーホント、この森は随分と厄介になったもんねー」

左手だけで小瓶のふたを開け、ひょいと右手をリグルの背中に伸

ばす。がしつ、と指先に力を込めて掴んだものを、そのまま力任せに引っこ抜いた。すかさず左手のポジションをぶっかける。

「痛いー　　！？」

「うっさいー」

「痛い痛い痛い！　何したんですかラックさ」

「クーでいいー。後様付け禁止ー」

ギャンギャンとうるさいリグルに、その背中、羽の付け根の所にくっついていたものを突き付けた。

「……………あの、えつと……………それは？」

「見たまんま、寄生虫だよー。宿主の精神力を吸い上げながら、周囲のモンスターを引き寄せるフェロモンをばらまく、ねー」

「……………いつから付いてたんですかそれ？」

「気付いたのは魔法遊撃隊ルテニウスが参加しだしてちょっとしたぐらいだったけどー、あの襲撃密度から考えて、私が森に入っていくらもしない内についてたんだと思うよー？」

突入後、普通に警戒していられたのは5分ほど。ちょうど私の後方についてきていた魔法遊撃隊ルテニウスが森に入って3分くらいだろう。リグルはハイレベルのパッシブスキル『MP自然回復』を持っているから、減少している事に気付かなかったのかもしれない。

面白いぐらい石化しているリグルに、私はその蚊とゲジゲジを足してピンボール大にしたような黒い寄生虫を、ぺい、と放り渡してみた。途端に再起動したりリグルは高速で詠唱を開始、反応を予想して咄嗟にしゃがみこんだ私の頭上を、バスケットボールほどもある火の玉がすっ飛んで行った。

……………あ、たまたま射線上に居た隊員が直撃食らってる。うーわ痛そう。今の、基本魔法の筈なのに、やっぱりリグルが使っとシヤレ



になんないなー。

「まあ、ああいうのが居るっていうのは分かったから、今度から気をつけようかー」

寄生虫を消し炭以下にしてもまだバタバタと背中をたたいたり周囲をキョロキョロしているリグルは放っておく事にして、私は明りが見えてきた方へと足を進めた。その先は予想とたがわず森の外で、その向こうに、懐かしさを感じる高い城壁が

「……見えると思ったら、何か邪魔なのが見えないしー……」

代わりに見えたのは、なんだか暗い苔色の壁みたいな何かだった。見上げてみると、上の方は何だか丸い。半球形の何かがあるのは分かったが、一体これは何なのやら。

とりあえず『マルチキラー』の槍の部分で突いてみようとしたところで、パニックから回復したらしいリグルが追いついてきた。足音からしてその他魔法遊撃隊ルテニクスの隊員も追いついたようだ。……敵の数が増えるだけで案外手こずるもんだね。まあ、前線を支える盾役がないから集中力要るけどさ。

まあともかく、一度は冷静になって森から出てきたリグルだったが、目の前にそびえる（？）暗い苔色の壁っぽい何かを見た途端、文字通り顔色を変えて叫んだ。

「……ウリアムーチ？ 何でこんな奴がここに！」

「あー、何か見た事あると思ったら、苔山かー」

「呑気に言ってる場合ですかっ！？」

そういえば居た。一定期間ごとに起こる町襲撃イベント限定の、超巨大モンスターのなかにああいうのが。前は画面越しに全体を見回

せてたから、足元から自分目線で見たら分からなかったという訳だ。

まあ正体が分かればどうという事は無い。こいつは超巨大モンスターの中间で言えばわりと下の方だし、倒せばかなりのうま味があると言う事で、町が経済的にピンチになった時はおびき寄せた事もあるほどだ。

「リグル、今すぐ魔法遊撃隊ルテニウスを連れて転移で町の中へ行つてー。んでもって私が帰ってきててー、外からコイツを切り崩しにかかるから町をしっかりと守る事、って伝言お願いねー」

「え、えええ？ 本気で言つて ますねハイ」

顔を見ただけで納得してくれると話が早い。「分かりましたよ分かってましたよ」とぶつぶつ言いながらもリグルは隊員をまとめ、少し離れた所に移動していった。

それを気配だけ見送りながら、私はアイテムボックスを開いて手持ちのスクロールを確認。

「んー、一応は苔山相手だし、随分使つてない気がするし、調子も確かめておきたいし、久し振りの帰郷つて事でそれなりに格好はつけてみたいし……奮発していきますかー」

そんな事を言つてみたりしながら取り出したスクロールの数は4枚。間違いが無いかも一回確認して、『マルチキラー』を右手に4枚のスクロールを左手に、苔山ことウリアムーチに向き直つた。

「とくとご覧、これぞ『アイテム使用系統魔法』の真骨頂！」

自分の気分を盛り上げるためにわざと芝居がかった調子で前置きをして、左手のスクロールを扇のように広げて持ち、私は呪文スベルを口

にした。

「カルテットスクロール重ね撃ちLV2、  
『アブソープ吸収』  
『エンチャント付加』  
『ファイア炎球』  
『バーン延焼』  
っ！」

十四話 幸運と現れたモノ（後書き）

色々無茶苦茶です。

## 十五話 幸運と術と蒼色と

スクロール、というのは、単発の魔法を放つ事が出来る使い捨てのアイテムの1つで、A4サイズの紙系素材（縦向き）に、上から呪文が3行 魔法陣 魔法の名前、という順番で文字その他が記載されている形をしている。

当然ながら、普通の使い方では大量のスクロールを持ち歩く必要があり、非常にかさばって面倒な事になる。……まあ、私の修得している『アイテム使用系統魔法』でも、普通に使っている分では大差ない。精々、系統の熟練度に応じてささやかな威力ボーナスが付く程度。

が。

『アイテム使用系統魔法』の真価は、その熟練度が半分を越えてからようやく分かる。

系統特有魔法の『重ね撃ち』。

これが実は、便利すぎて困るレベルの秀逸魔法だったりするのだ。

………使う方が面倒くさがらなければ、という注釈付きで。

『重ね撃ち』で使えるのは同レベルの同アイテムのみ、つまりスクロールとポーションは組み合わせられず、Lv1のアイテムとLv2のアイテムは混ぜられない。

さらにその重ねられる数は熟練度MAXで10個。無限大にも思える組み合わせがある訳で、そこが優秀なのに逆に毛嫌いされる原因となっている。確かに、ある程度以上は考えないと元々のアイテムより効果が低くなったり、自分にダメージが跳ね返ってきたりする

るけども……。

どうも、決まった呪文スベルを唱えたり魔法陣を書いたりする事に慣れた人には向かない魔法だったと言う事に『Free to The re』の終盤で気が付いた。

で、不遇な扱いを受けている『重ね撃ち』なのだが、私はどーにか使いこなす事に成功した。勝因は『重ね撃ち』でないと効果が出ないアイテムの使い方を覚えた事だと思う。

その結果は 今、私の手元で炎を纏った『マルチキラー』、その威力を見てもらえば分かる事だ。

「重量級汎用アーツ、其の一」

目の前にそびえる苔色の山、ウリアムーチに狙いを定めて『マルチキラー』を背負うように構える。長い柄の一番端を持って、斧の部分がウリアムーチへ当たるように思いっきり力を溜めた。

「『チャージクラッシュ』!!!」

ズドンッ!!! という盛大な音を立ててウリアムーチへと突き立ったのは、その一瞬だけを見るなら斬撃というより炎の壁だった。もちろんそのまま消える訳が無く、直撃した場所とその周囲は燃え続けている。

『エンチャント  
付加』というのが『重ね撃ち』専用のスクロールで、その後  
に続くスクロールを属性として対象に付加するそのままな効果を持つ。  
でもって『吸収アブソーブ』というのも、その後  
に続くスクロールを対象に取り  
込ませる、やっぱりそのままな効果がある。

図解すると 対象 『吸収』 「『付加』」 『火球』 『延焼』

「……って感じだろうか。裏技っぽいが一応、多重付加、という状態になって、ただ付加するよりかは効果が上がっていたりするのだ。」

そんな訳で、切れば燃える上に当分火が消えない、燃えやすい特性を持つ敵にとっては文字通り天敵となる刃を持った『マルチキラ』。ウリアムーチは苔の山のような外見通り火にとても弱いので、いうなれば「こうかはばつぐんだ！」状態。

「……………に、しちやーいけなかつたんだっけか確かー……………」

飛び上がった上空で、火属性に変わった『マルチキラ』を右手一本で持ったまま、左手で頭をかく。この高さの上空から見下ろしてようやく見なれた姿のウリアムーチは、半円球の……………スライムにしては硬そうな外観のまま、森を派手に破壊しながらドツタンバツタン暴れまくっていた。

ふと視線を移せば、その向こうに広がる懐かしい景色。ウリアムーチなんて比較にならないほど見なれたその景観に、私は一度だけ笑みを浮かべる。

「こうやって見ると『帰ってきた』って思えるな……………。いや本当、比喻でも何でもなく、何もかもが懐かしいやー」

森の中、ぽっかり空いた広大な草地の真ん中に、忘れられてしまったようにポツンと存在する町。

取り囲んでいるのは緑の光を宿した白銀に輝く高い壁。尖塔を備えた対大型モンスター・戦争用の防壁は円を描き、内に広がる高い低いごたませの街並みを一重で守っている。

様々な種族が共存している証にぱつと見ごちゃついている町並みは、その中に巨大な水晶や巨大な穴なんかを含みながら壁の内側いっぱい広がる。町が描く円の中心には丸く平らな天蓋を見せる塔

が建ち、五方星を描くようにそれぞれが回廊で接続されている。

その中に、なお守られるように存在しているのは、その全てが暗い灰色の絵にかいたような城だった。防壁や周囲の塔と比べると華奢な印象すら受けるその城は、他の塔と同様に回廊によって接続されている。

……まさか、何かあれば即刻この町そのものが、対地対空迎撃兵器を備え全てをはじき返す結界に覆われ潤沢に資源を抱え込む、堅固極まりない要塞と化すなど思えない位には、それなりにありふれて平和な町だった。

「つまりだねー、苔山程度にくれてやれるほど、あの町は安くは無いて事ー」

右手で『マルチキラー』を持ち直す。未だまといついた火によって燃えているその刃を、滞空したまま体と垂直に構える。ギリギリと弓を引き絞るように狙いを定め、私は一度、大きく翼をはばたかせた。

「重量級汎用アーツ、其の五」

1メートルほど浮き上がると、そのまま体ごと上下を入れ替える。引き絞るように構えた『マルチキラー』で使うのは槍の部分。暴れまわるウリアムーチの一点に狙いを定め、

「『アースクラッシュ』!!!」

タイミングを合わせて翼で空気を叩き、通常このアーツを使う時の、倍近い速度で苔色の巨体突っ込んで行った。



十五話 幸運と術と蒼色と（後書き）

説明と描写。なお『アースクラッシュ』は“上空から急降下しダメージを与える”ものなので重い武器なら何でも使えます。

## 十六話 幸運と働く者

『クー様っ、魔陣殲滅隊および呪術補完隊、配置完了しました！  
危険ですので一度離脱してください！！』  
ニオビウス カルドミウス

とりあえずウリアムーチ相手に燃え盛る『マルチキラー』で奮戦していると、頭の中にリグルの声が響いた。テレパシーのようなこれは確か、個人指定のささやきチャットだったか。

その声に『了解了解ー、あと一撃技あり入れたら町のほうに逃げろー』と返答し、『マルチキラー』を手の中で回して持ち直す。そのままウリアムーチの足元（？）に滑り込むと、

「重量級汎用アーツ其の一、」

左下に斧頭を向け、ヒットするところに備えられているのは鉤。右上に振りぬきながらアーツを発動する。

「『チャージクラッシュ』！」

本来の扱いからすれば威力半減もいいところだが、私の偏りまくった筋力値STRはただのはずれでは終わらせない。鉤で引っ掛けたウリアムーチを、文字通り力任せにすくい上げる。

結果、苔色の山は、きれいにひっくり返った。

私はそれを確認する前に翼を一打ちして加速し、町の壁近くまで避難していた。重すぎる落下音の後に残ったのは、どことなくあわあわしながら巨体をゆすっている、おわんの形の何か、だ。

それを眺めながら、私はささやきチャットに合図を出した。

『退避完了ー。両隊、加減なしの盛大にやっちゃってー』

合図を出したのは、魔法使いで編成された部隊の中でも手間暇惜しまず大火力に特化した魔法陣<sup>ニオヒウス</sup>殲滅隊。そして+ - 関係なく補助系魔法に特化させた呪術補完隊<sup>カルドミウス</sup>。

一応うちの町を守る守衛軍の中で、一番被害の大きくなる、じゃない、瞬間最大範囲・最大火力を叩きだす組み合わせだ。

あの組み合わせで一度魔法を<sup>スベル</sup>呪文を唱える系統ではなく、魔法陣を描く系統<sup>イテイング</sup>の、だが 連射した時は、一面が荒野になって何一つ残らなかった。前線を保つために前へ出していた別の部隊を呼び戻すのがもう少し遅ければ、彼らも間違いなく消し飛んでいただろう。

そんな物を、本気を出して時間をかければ私1人でも倒せるウリアムーチに向けたらどうなるか、というと。

ヒュルルルル……と合計5つの炎弾が等間隔で打ち上げられた。曲線を描いて落下軌道に入った小さな小屋ほどもある炎弾はウリアムーチに当たる直前でぶつかり合って融合。

念のために『マルチキラー』を『八方守護陣盾』に持ち替えて正面に構えた所で、

着弾。

ツドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

比喻も何もなく、文字通り天をも焦がす巨大な火柱が立ち昇った。防御力のみが取り柄の大盾『八方守護陣盾』を構えてしっかりガードしているにもかかわらず押し寄せる熱気は焦げてしまうかと思っ

程。  
火柱はそのまま数秒立ち昇り続け、唐突に火の粉を散らして消滅

した。私はさらにそこから数秒待って、構えていた大盾をアイテムボックスにしまいこむ。

そして再び見えた景色の中にあっただのは、完全な消し炭と化したウリアムーチの残骸だった。

魔法陣を描くのにかかる時間はいえ、たった一発の魔法でこの通り。呆れ3割感心3割、誇らしさ4割で思わず呟いた。

「……あいつかわらず凄まじい火力してるなー」

「あれを編成したのはお前。というか、どこに雲隠れしてたこの行方不明者」

そんな複雑な感慨にふける私の背後から、妙な言葉遣いでぐさぐさ口撃してくる誰かが1人。とはいえ聞き覚えのあり過ぎるその口調で初めて聞く凜々しくもまだ幼い男の子の声に、私は後ろへ振り返りつつ反論した。

「グラキア。君、毒舌に磨きがかかってるよー。この1000年で君に何があつたのさー」

「どこぞの阿呆が行方不明になって、事後処理に追われて暇なし休み無しの仕事三昧」

「あー、そりゃごめん、悪かったー」

ピンと立った犬耳、クルンと丸まった犬尾、ブラウンの毛並み&髪とダークグレーの目を持ち、燕尾服を着た少年がそこには立っていた。彼はグラキア・リボラス。紆余曲折あつた後、うちの町の補佐官に収まってくれた有能すぎる存在だ。

通称は……まあ、それぞれに呼ぶ。中でも多いのはグーとグツキー。なお、良く間違われるのだがグラキアはコボルトではない。現在の見た目は良く似ているものの中身は全く別物である。

で、グラキアは私のいい加減にも聞こえる謝罪をどう取ったのか、

ため息をついて寄りこした。その無表情のまま続ける。

「とにかく一度マスターに会って宥めて話をして何とかする事。本人が居るとなれば抑え切れないだろうし抑える必要は無いし、そうならばこちらの手には負えないから完全に一任」

「ん、了解了解。で、私の可愛い妹はどこにいるのかな？」

「……相変わらずはた迷惑な程の妹好き。今はウリアムーチ出現との報で飛び出しかけたのをお前の到着の知らせで執務室に足止め中」

ぼそつと何か聞こえたぞ今。まあしかし、どこまで行っても私は私のままでいいのね、反応見る限り。やれやれ、管理者の過去のねつ造はこういうのに気を使うから勘弁してほしいんだと言うのに。

まあ、私のままでいいと言うなら随分楽だけど……それにしても、『Free to There』での簡単すぎる入力でよくここまですの性格を再現できたな。

「執務室かー。ん、分かった今から行ってくるー。素材の回収その他諸々は任せたー。……てか今スルーしかけたけど、お前じゃなくてクーでよろしく。何かお前だと心に刺さるー」

「分かったから早く行け放浪姉。それに言われなくても手慣れた作業。心配される程未熟なままな訳無い」

容赦なく言葉の刃を飛ばしてくるグラキアに、あっはっはー、と笑い声を返しながら、私は門の方へと歩き始めた。この分だと町の様子も変わっていないだろう。という事は、執務室は多分、町の真ん中の城の、そのまた真ん中にある筈だ。

しかし、グラキアの性格は『皮肉屋』としか書いてなかったからちょっと意外だった。どこまで厳しい毒舌になってるんだ。確かにちらっとだけ見えていた言動は厳しかったけども。

「……てことは、何かー。もしかしたらフォーも、あのファイルに書いてある以上に私の事大好きだって可能性があるよー」

「……ちょっと本気で、嬉しさで倒れないか心配になってきた。」

## 十六話 幸運と働く者（後書き）

この戦闘、名前の出た2つの部隊以外にも、前衛職の部隊等たくさんの方が働いていました。

## 十七話 幸運と世界の変化

まあ、フォーとの顔合わせは、大体お約束の通り行った。

……「おねーちゃんっ！」と声を上げて、白いドレスアーマーを着た私より若干背の低い子が飛びついて来るのは、本当の本当に破壊力があつた、とだけ言っておく。それはもう、思わず力任せに抱きしめてあつちこつち撫でまくりたいのを我慢するのに、殆どすべての精神力を必要とするくらいには。

唯一の懸念として偏っている筋力値STRのせいでこちらがダメージを負うかもしれない、というのがあつたが、どうやら種族的に頑丈な体らしかつたので全く問題なく。

「おねーちゃん、本当にどこに行つてたんですかー」

「あー、まー……こつ、あつちこつちふらふらと世界中をー」

現在、たつぷり1分はくつついた事でひとまず満足したらしいフォーと、お茶を飲みながらのんびり会話をしたりする。出てきたのはミルク・砂糖たつぷりな紅茶風の桜色のお茶と、クッキー大に切ったパイ生地パイ生地に砂糖をまぶしたようなお茶菓子だ。非常においしくてこれだけでも満足満足。

会話する内容は、主にフォーが聞いて私が答える形。質問は予想通りこの100年の間どこで何をしていたのか。まさかこの世界にいなかったなんて言える訳がなく、その辺は適当にごまかしている。そんなレッツ質問タイム：フォーのターンが何とはなしに終了したところで、今度はこつちから気になつていたことを聞いてみる。

「そついやーリグルに聞いたんだけど、ある時からコロコロの森で魔法に制限がかつたつてー？」

「もう聞いてたんですかー。そうなんです、護衛からの帰りでひと



つとびしようとしたら、魔法自体が発動しなかったらしくて……原因はいまだ不明なんですけどー」

「不明ときたかー……となると、対策としちゃ森の半分の位置に植林してみるしかないかなー。他になんか変わった事はー？」

「んと、他にはモンスターの襲撃頻度が上がったたり、ダンジョン深部のモンスターのレベルが突然頭一つ飛び抜けたりですー。あつ、町の中の鉱水晶の質の、上限が上がったんですよー。前までは天然でしか採れなかったランクが採れたらしくて、お祭りになりましたー」

「おおー、そりゃありがたいー。しかし、襲撃頻度の上昇に深部モンスターの超強化、ねー……やれやれ、一体何がどうなってるやらー。とりあえず防衛に力を入れるくらいしか手の打ちようもないかー」

仲良くもぐもぐお茶菓子を食べながら話は続く。うまうま。

さてまあここまで来ると分かるが、様々な変化というのはどうも私達の言葉で言う所のアップデートによる変化の事らしい。ダンジョン深部のモンスターが強化されたと言う事は、レベルキャップも引き上げられている可能性が高い。

ん？ フォーと私の話し方がそっくりで訳が分からなくなるって？ 柔らかく喋ってるのがフォーでそうじゃない方が私。要するに丁寧語かそうじゃないか、語尾をよく見てくれればすぐ分かる。って、だから私は誰に解説してるんだろつ。

「？ おねーちゃん、植林って、なにをどうするんですかー？」

「ん、コロコロの森を上空から見てー、半分的位置に、びしーっと他の所に生えてる木を並べて植えたら、転移系魔法が使える場所がよく分かるでしょー？ 迎撃能力持ちの木を植えれば防衛にも役立つだろうしー」

「ああー、それいいですー！ グッキーさんに後で言っておきます

ねー」

「……まー、その苗木をどっから調達するんだってー話でもあるんだけどー。ま、とりあえず何とかしちゃうような気もするからいいかー」

目を輝かせるフォーを見つつ、お茶を一口。なおコロコロの森と  
いうのは、ここに来る時にエンカウントしまくりだったあの森のこ  
とだ。どこか愛嬌のある名前の割りに出てくるモンスターがシャレ  
にならないレベルなので、ある種のブラックジョークなんではない  
かと勘ぐるプレイヤーもいる。

……うーん、ついでだから町の防御も強化してみるかな。どうせ  
植林するんだったら森のこっち側にも植えて、こっさりその間を前  
線基地……いや、場所を選べば畑とか果樹とかもいけるかもだから  
補給基地みたいにして。

「けどまあ、ダンジョン深部のモンスターについては要警戒しないと  
だめだねー。強くなってからこっちの『大侵攻』ってどんな感じ  
ー？」

「それが驚きなんですよー。ボスクラスが複数混じっている時の強  
化レベルがおかしいんですよー。どうしようもなくなって、何回か  
フレティアス騎竜親衛隊が攻勢に回った事もあって、落とされた事こそないもの  
のーって感じですよー」

「……フレティアス騎竜親衛隊が攻勢って、マジでかー」

『大侵攻』というのは、定期的に起こる町へモンスターが大挙し  
て襲いかかってくるイベントだ。防衛できないとそれはそれは悲惨  
な事になる物で、これを防ぐために町の主たるプレイヤーは軍を編  
成し防御に当てるのだ。編成と作戦の腕の見せ所である。

そしてフレティアス騎竜親衛隊というのは、この町の守衛軍最強の部隊の名前  
だ。自分で言うのも何だが渾身の出来で、普段の戦争に参加すると

相手を瞬殺してしまう為、よほどの劣勢でない限り防御に回っている。

それ故に、ブリテイアス騎竜親衛隊が攻勢に回る、というのは、そのままずばり、陥落の危険があったという事だ。

「……フォー、まさかとは思うけど、ダンジョン探索の頻度って下げたりするー？　そんでもって待機の時間を増やしたりー」

「よく分かったですねおねーちゃん。2割下げましたー」

「……進言したのグッキーだなあんにやるー……。あれでもギリギリ限界の頻度だったのに、そこから下げたら悪循環に突入するじゃーんもー」

「悪循環、ですかー？」

聞いた話を集めて状況を判断する。

正直な所限りなく最悪な状況に思わずため息をつく、フォーが小首をかしげて聞いてきた。お茶を飲みながらどう説明するかしばらく考えて、とりあえず、あっさりと概要だけ説明してみる。

「1、ダンジョン攻略が進まなくなるー。2、ダンジョンでモンスターが溜まるー。3、モンスターが溢れて『大侵攻』の回数が増えるー。4、守りに入らざるを得なくなるー。でもって守りに入ると1に戻るー」

「……ってことは、もしかして、守れば守るだけじり貧になる、って事ですかー？」

「そゆ事ー」

どうやら、相当マズイ状態だと言う事はフォーにも伝わったようだ。

……ちょっと伝わり過ぎたようで、顔が青くなってるけども。

十七話 幸運と世界の変化（後書き）

帰ってきた場所は、わりあい危機に陥っていました。

## 十八話 幸運とその町の守手

ウリアムーチ襲来の翌日、大量に手に入った素材により湧きたつ早朝の町に、こんな放送がかかった。

『あー、と……アウラウス騎狼突撃隊、フェルルウム盾剣汎動隊、カブラウム双剣在隙隊、マガニウム短槍奇兵隊、ローディアス魔剣武演隊、アシエテウス魔医支援隊の各隊長に通達ー。ダンジョン探索の事で用事があるから、昼前に訓練場に集合するようにー』

かけた声はこの町設立の立役者、この町の主の姉のもの。呼ばれた当人でなくても、おや？ と手を少しだけ止める者が何人もいたが、それ以上何も放送が無い事を確認して、またそれぞれの日常に戻る。

『あー、それとグラキアー？ 後でちょっと話があるから、昼過ぎ頃コロコロの森方面の城門に来る事ー』

ただ、数秒後に付け加えられたその言葉に、再び町民は顔を見合わせる事となった。

お城の一室でぐっすり眠った翌日。フォーに教えてもらった放送室で招集をかけた私は、今度は自分の方の準備を整えていた。具体的には、ポーシヨンやスクロールの合成・作成。どーやら私の為の部屋らしい結構な広さのあるその場所で黙々と作業をしていると、トントン、と控えめにノックの音が聞こえた。

「はいよー」  
「失礼」

端的に言って入って来たのは、昼過ぎに呼びだした筈のグラキアだった。

「何か用事ー？」

「……？ 用事があるのはそっちの筈。昼まで待つ必要は無いと判断」

「いや、一応それでも時間は守ろうとか思おうよー」

一応だが、あの時間を選んだ理由もあるのだ。全くフォー至上主義なのはいいがそのせいで他をないがしろにされては困る。

が、まあどうせ一応と付く程度の理由だったんだし、と書きかけだったスクロールを仕上げ、グラキアの方に向き直った。

「まーいいや、どうしてもその時間じゃなきゃだめだってわけじゃ無かったしー。あれだ、この後も予定詰まってるからさくさく進めようかー」

「……たまに、せめて語尾の伸ばすのを止めろと思わなくもないが、本当」

「言つとくけど、私がフォーの真似してるんじゃないかってフォーが私の真似してんだからねー？」

「そんな事は分かってているがその上での発言」

……私だって、何でそんな珍妙なしゃべり方になったのかとちよつと問い詰めたいのだけでも。

しかしとりあえずさくさく進めよう意識を切り替え、いきなり本題から斬り込む事にした。

「グラキア。まず、あんたの失策について私は怒ってるんだよー」  
「……………失策？」

「ダンジョンの探索頻度下げたでしょー。あれさー、グラキアにはちゃんと裏の理由まで含めて説明した筈なんだけどなー。何、あれぐらい下げるなら大丈夫だとか思ったー？」

「……………」

直立不動のまま黙り込むグラキア。それは自分でも思い至っているんだろ。現に、フォーから借りて読みきるまで昨日の夜中までかかった膨大な書類には、探索頻度を下げたから、じわじわと襲撃頻度が上がっている事実が書かれていた。書類整理はグラキアの業務だった筈だから、気が付いていない訳が無い。

「他にも部隊の管理は事によったら力づくでも解決しろとかー、移民受け入れに制限を設けるとかー、色々言っておいた筈の事がそうになってないっていうのも一杯あるけどー、一番怒ってるのはそこー」

黙ったままのグラキアに、私も大概過保護だよなあと思いつながら言葉を突き付ける。

「『守れ』。そう言った筈の、一番大切な要がないがしろにされてるって、どういう事？」

それは『Free to There』で、全てにおいて住人の意思を尊重してきた私が、グラキアに下した最初で最後の命令。それ以外はその命令がこなせるように諸々の教育と、周辺の仕組み整備に終始した。

『守れ』というのは、フォーを、という意味ではない。フォーを含む、この町の本質である住人を守れ。そういう意味だ。だから私

は過去、町という建物を放棄して住人を逃がすのに全力を傾けた戦いも何度か経験してきた。

けど今回グラキアは、防衛における肝心要である初期防衛を怠った。いざという時致命傷になりかねない隊同士の不和を放置した。この町の生命線にして根本である移民に制限をかけた。だから私は怒っているのだ。

「……じゃあ何で100年も町を放ったまま行方不明？」

「100年は初めてだけど、数か月単位なら今まで何百回と放置してきたでしょーが。ていうか、ほぼ毎日居たのなんて建設初期だけだしー？」

「……主が不安がって下した判断。修正を入れつつも基本的に従属」

「それを宥めて支えるのがグラキアの仕事だと言った筈なんだけどー。それに、最終的には私無しで全てが回るように、住人だけこの町がやっていけるように、そう仕組みを整えたって教えなかったっけー？」

言い連ねるグラキアの言葉を『言い訳』として一刀両断していく。かなり手厳しいが、やる時はこのぐらい叩き潰さねば反省しないのだからしょうがない。全く、どこの誰のせいでこんな石頭になったのやら。いや、元々か？

「……………」

「努力は認めるし鍛錬も怠ってないみたいだし、全く評価しない訳じゃないんだよー？ けどね、あんまりにもあんまりな失点だから無視できないっていう話なだけだー」

黙り込んだグラキアに、おけー？ と付け加えて最終確認を取る。頭の方は、固いだけで悪くは無い筈なので、理解するのをしばらく



待った。

「……………つまり、やはり本当のマスターはクーであるから基本を尊重?」

「だから何でそうズレた答えに行きつくんだよグツキーくん」

十八話 幸運とその町の守手（後書き）

主人公、怒る。ちょっとだけ（え

年末特別編をしようかと考えてます。  
活動報告でアンケート中。

## 十九話 幸運と役割分担

「相変わらずのセオリー無視……。わざわざ襲撃直後を選ぶ理由が理解不能」

「はい……。いやいやー全く分かってないねグッキーはー。あいつらは一定周期で襲撃してくるんだからー、少なくとも襲撃直後から1日の間、町は絶対安全になるんだからー」

「……警戒して守りを固めていたのは、」

「うん、完つ全に逆効果だからそれー」

「……………」

あれから説得に丸々1時間を費やし、何とかグラキアの誤解をほどくのに成功した。やれやれ、頭が固いつて本当に厄介だから困る。時計を見てぎよつとなるくらいの残り時間で慌ただしくアイテム製作を終え、現在私とグラキアは早朝に放送したとおり、防壁のすぐ内側にいくつかのスペースに区切られて存在する訓練場、その内、ただ広い砂地が広がっている乱戦訓練場に来ていた。

やがて、ともいえないくらいの時間で、接近してくる何かが見界の端に広がっていた簡易マップの片隅を通る。私は『マルチキラー』を取り出すと、槌の部分が当たるように狙いを微調整して、タイミングを合わせて左から右に思い切り振り抜いた。

「どおあああああ……！」

ゴパン！ とクリティカルな音と共に吹っ飛んで行ったのは、体長が2メートル以上はある灰銀色の狼と、それに全く違和感なく乗っていた鬼人<sup>オイガー</sup>。共に武装していないところに私のフルスイングをモロ食らいしたようだが、まあ問題ない。どうせピンピンしてる。

『マルチキラー』を右肩に乗せて（というより、肩を支点に担い

でもうしばらく待つと、今度は5人分の気配が足並みそろえてやって来ていた。まともに訓練場の入り口から来てくれたところにくっすり胸をなでおろしたのは秘密だったりする。

「ん、隊長は全員揃ったねー。あ、騎狼突撃隊のバルグはさっき見たから気にしないようにー」

ずらりと横一列に並んで見せてくれた5人は、私が放送で呼び付けた6つの隊の隊長を務めている実力者だ。なお、さっきフルスイングで吹っ飛ばしたのがバルグである。何故何も言わずにふっ飛ばしたかというと、

「いやアさっすが、良い喝の入れ方すんなア姉御は！！」

ち、もう復活しやがったか。

……という独り言は置いておいて、つまり体力バカで脳筋なので、出会いがしらに一撃かますのが挨拶代り、あそこで私が何もしなければ吹っ飛ばされていたのはこちらなので仕方が無い。

なおバルグが乗っているのは、スラッシュアックスという狼系モンスターの上位種。戦闘モードに移行すると全身の毛が刃状になる非常に危険な大型狼である。その騎手であるバルグは能動・受動両方で使えるスキル『気』を習得している為に、種族的な頑丈さも手伝って間違っても傷を受ける事は無い。

ちなみにここまでの特徴は騎狼突撃隊アウラウスの隊員全てに言える。ここまで説明すれば、何故隊名に“突撃”と入れたのか理解していただけたと思う。誰に説明しているのかは分からないけど。

「ややこしい説明は苦手だから、結論から言っつて要点だけ話すよー。疑問があつたら質問タイムまで待つてねー」

暑苦しいのは放っておいて、後の5人の方を向いて説明を始める。

「えー、これから今呼びだした隊をチーム分けして、ダンジョンの攻略に行ってもらおうよー。昨日の防衛戦で疲れてると思うけどまあ出来うる限り死力を尽くして頑張る事ー。はい、んじゃ一回目の質問タイムー」

……うん、皆（1人だけは除くけども）頭いいから質問は無いね。

「じゃあ組み合わせ発表ー。まず、ローディアス魔剣武演隊とマガニウム短槍奇兵隊で【困惑の樹海】を攻略、目標はドリアード・ガーディアン樹姫の守護者の討伐もしくは行動不能程度の損傷ー」

レイピアを腰に下げた波打つ黒い長髪と血色の目の美しい女吸血鬼ヴァンパイアと、1メートルほどの短槍を背負う小麦色の刈り込み頭に茶色の目の男小人ホビットがそれぞれ笑顔で頷きを返してきた。  
それを確認して次へ。

「私とグラキアとカブラウム双剣在隙隊で【宵闇の洞窟】を攻略、目標は……  
そうだねー、グラキアが入ったから最下層目指してみよーかー」

両腰に一本ずつロングソードを下げた黒ショートヘアに黒目あと身長150センチの男攻妖精スプリガンがちよつと困った顔で頭をかいた。が、私がつ、と笑いかけると、苦笑してこくりと頷く。

うん、問題ない。あるとすれば、最後だ。

「で。アウラウス騎狼突撃隊とフェルルウム盾剣汎動隊とアンジェテウス魔医支援隊で【万象の頂】を攻略、ここ一番大事だからー、目標は登頂に加えて出来うる限りの敵の殲滅ねー。まー排除はアウラウス騎狼突撃隊に任せて、あと2隊は援護と適度な補助に回ってればいいからー」

「うおおおおおつしやあああああああ！！」

雄たけびを上げるスキンヘッドで金目で緑がかった肌の大柄な奴はさらつと無視して、目を向けるのはバツクルとエストックを背負った長いストレートの金髪に青い目の男ハーフェルフに、すっぽりローブに収まって白いロッドを握りしめた綿毛シヨートの白い髪と灰色の目で地上から若干浮いている女善霊<sup>マネス</sup>。それぞれ、呆れ苦笑と健気真面目な顔で頷きが返った。

一番不安と言えば不安なのはここだ。まあ、万が一にも完全後方支援特化の魔医支援隊<sup>アシエテウス</sup>が全滅する事は………無い、と思いたい。その為に攻守のバランスに優れた盾剣汎動隊<sup>フェルルウム</sup>をつけたのだし。

「はい、ここまでで何か質問とか不満とかある人ー」

……。よしよし、早速暴走してどっかへすつ飛んで行ったバカ<sup>バカ</sup>以外は目標をちゃんと分かってくれたみたいだね。特に盾剣汎動隊<sup>フェルルウム</sup>と魔医支援隊<sup>アシエテウス</sup>の連携に関して早速打ち合わせを始めようとするその心配りは素晴らしい。

そう思っていると、隣のグラキアが何か言いたげな目線を寄こしてきた。……ああ、はいはい、やる事終わったからさっさと仕事に戻りたいのね。

「お昼を済ませたら出発するつもりだからー、時間無いけどモンスターの強化具合とか含めて出来る範囲の準備は整えておく事ー。それじゃ、解散ー」

パン、と手を打ち合わせて宣言すると、一礼したりしなかったり敬礼してみたりしてみなかったり、三々五々に5人の隊長は散って行った。

グラキアもグラキアで、とつと屋根を飛び越える直線ルートで

城へと戻っている。

「さて、それじゃ腹しらえしておきますかー」

のんびりと独り言を呟いて、私もその場を後にした。

十九話 幸運と役割分担（後書き）

今回たくさんでてきた固有名詞。

……いずれ説明書風のものを書こうと思ってます。



## 二十話 幸運と世界の違和感

周囲にあるダンジョンの1つ、ゴーストだのゾンビだのを筆頭に果ては死神や暗殺者まで出て来るホラー&即死注意な洞窟ダンジョン【宵闇の洞窟】<sup>カブラウム</sup>を双剣在隙隊に援護してもらいつつ、グラキアとの連携で攻略。

最下層で待ち構えていた冥府の神（といってもここにいるのは邪神の類で、モドキ、の形容詞が付く奴なただけ）を、湧きでる他の雑魚の掃討の方に手こずりながら撃破。残念ながらレアドロップは出なかったものの、ほとんど無限増殖的に呼び出された大量の雑魚が素材アイテムを落として行ってくれたのでそれなりに黒字になった。

ブラウザの『Free to There』には無かった腐臭とか冷気とかにうんざりしつつ、むしろ行きより積極的に敵を殲滅しながら帰りは終了。あーやれやれ、と見上げた空はおやつ時の暖かい物で、しまっただー、と思いながら執務室に戻ると思った通りフォアに抱きつかれた。

それを匂いと汚れを理由に引きはがし、代わりに無理やり放り込まれたお風呂場で、

「……どこまで凝ってんのさ運営……」

とか独り言を言いながら洗い流す。普通に普通のお風呂場でした。なんかスイッチの代わりに魔石っぽいのが埋まっていたけど、そこはファンタジーであるこちらの世界に合わせてあるらしい。

さっぱりした気分でいつの間にか用意してあった着替え（ただし、風呂に入る前と全く同じ灰色シンプルワンピース型インナー）を着て部屋に戻る。と、いつの間に着替えていたのか色から形から全く同じ服を着たフォーが待っていた。

そして再び飛び付かれるのを苦笑で迎える。……あ、今気付いたけどほんとはーにちよつとだけ私の方が背高い。

じゃれあいながら部屋を移動。私の部屋にフォーもついてきて、顔を出したグラキアも引つ張りこんで晩御飯。パンとグラタンとサラダでおいしくいただいで、さて寝るまでどうしようかな、と席を立った。

「ん？」

その時、ふと耳に届く鈴の音。何かと思って思わず眉を寄せると、意識の集中を感知して、自動的にシステムウィンドウが立ちあがった。半透明に黒く文字と縁どりが白い私にしか見えないソレは、その一角を黄色に点滅させている。

それはフレンドメールの着信お知らせ。

送り主は、確か念のために30時間したら一度ログアウトしてみると言っていた、あの初心者木精霊<sup>ドリュアス</sup>。

名前をフェーネと言って、私が経験者であるを知って友達と一緒にフレンド申請してきたのだ。まあ上限も無いしいいか、と気軽に受けた相手からのメール。

『Fragment of "The World"』において何気に記念すべき一通目のメールとなったその内容は、

『30時間が経過しましたが、ログアウトできません。GMコールしてもどうやら届いていないようです……。すみませんが、会ってお話しできないでしょうか』

それは相当に、重い内容だった。

「お待たせしたよー。ごめんね、辺境に行つてたもんでー」  
「あ、いえ。こちらこそ突然すみません」

バサリ、と翼で空気を叩いてクッションにして降り立ったのは『始まりの町』の中央広場。一度地面を歩いて来ればそれ以降は犯罪者にならない限り出入り方法自由な為、最速の方法で合流場所へ到着した私を、フェーネは東の端で手を振りながら迎えてくれた。

そこにいたのは体感時間で昨日の昼に一緒にいた、フェーネを含む人間以外の種族を選んだ新人3人。どこか途方に暮れたような顔をしている彼らに、とりあえず私は状況の詳しい説明を求めた。

「ログアウト出来ない、だっけー。具体的にはどーいう感じで？」  
「画面下のログアウトボタンなんですけど、押しても変化が無いんです……。他の機能は動きますけど、宿屋で眠ってもそのまま目覚めてしまいますし」

その言葉にふむふむと頷く。試しに自分のを開いてみるが、ちゃんとログアウトボタンはいろんな窓の一番下にちゃんと存在していた。

なお“宿屋で眠ってもそのまま目覚めてしまう”というのは、VRMMOならではのログアウト方法で、脳が睡眠状態に移行したのを感じた“Lucid Dream”が自動的に接続を切る機能を使った所謂『寝落ち』というものだ。

……接続の為の“Lucid Dream”が病院にある以上眠ってしまうのはどうかと思つたものだが、深いながらも短い眠りを入れる事ですっきり目覚められるらしい。お陰でゲームした上リフレッシュ効果も得られて一石二鳥なんだとか。

閑話休題。

「うーん……しっかしなあ、GMコイルが届かないって事は、裏側から調べた運営からしてみれば仕様どおりって事なんだよねー。つまりエラーとか不具合とかそういうのじゃないって意味でー、どこの小説みたいない性質の悪い仕様で無い限り、どっかログアウトの方法はある筈なんだけどー」

思い出すのは少し前に流行った、VRMMOを題材とした人気小説だ。まさかログアウト不能でデスクゲームが本来の仕様、とか言う訳ではないだろう。

そもそもデスクゲームであればデイーグはとづくにこの世界からも現実からも退場している訳で。あの妙に硬い喋り方をする戦闘狂と会えたと言う事は、少なくともデスクゲームではない訳だ。

「ともかく情報が足んないか……。他の知り合いとか、誰かに聞いてみたりとかしたー?」

「あー……ミイーラさん達にも聞いてみたんすけど、あっちも同じ状況らしいス」

はて、ミイーラ? ……あ、キツめ美人な女人魚<sup>マーメイド</sup>さんか。しばらく考えないと思いだせなかった。そっかあの人か。そういえば彼女とはフレンド登録してないや。うっかりあの騒ぎで忘れっぱなしだった。

「あの、ラックさん、はどうですか?」

「クーでいいよクーでー。……でもおかしいなー。私はこれが初めてのVRだからあの変更点聞いて不安になってさー、来る前に一応ログアウト出来るか確認したんだけど、普通に警告文が出たから大丈夫だと思っただけどー」

「……へ?」

首をひねって自分のシステムウィンドウを見ている私に、聞いてきたフェーネがちよっと間の抜けた声を出した。

「け、警告文が出たんですか？」

「？ うん。来るって言っても空飛んで来る途中だったから、流石に危ないかなと思ってやめたんだけどねー」

あれ、心なしか物凄い呆れた目で見られてる気がする。というかフェーネさん、そろそろ口を閉じたらどうか。そんなにぽかーんとしちゃって、って、もしかして私のせい？ え、何か変な事言っただけ？

「……明らかにこのゲームの経験者なのに、そんな初心者ですらないようなミス……」

「いや、それより警告文が出た事の方が重要だよ。それすら出ないってどうしたらいいのか」

固まっているフェーネを放置して話し合う2人。いやいや、君ら一応友達じゃないのか。ん？ 友達だから敢えて放置してるのか？

「私との差って言ったら……何だろう。ごめん、あり過ぎて原因は分かんないやー」

「そりゃー……まあ、そうスよね」

「てことは、何かログアウトにすら条件が必要だって事だから……どうしたらいいんだろ。ねえフェーネ、そろそろ再起動して何か考えて？」

「……………はっ！」

お、やっと再起動が掛かったか。

「え、えーと……とりあえずらっ、えつと、クーさん。今ここでもログアウトできますか？」

さん付も別にいららないんだけどなあ。まあいいか、口癖みたいなもんだと思えば。

とりあえずその声にシステムウィンドウを不可視（自分にしか見えない）モードから可視（他人にも見える）モードに切り替え、3人だけに見えるように身体の向きを変えてからログアウトボタンに触れる。

そして1秒もせずにはずらりとメニューが並んだウィンドウの上に浮かび上がった、『ログアウトしますか？ Yes/No』の小さなウィンドウを黙って指さした。沈黙する3人。

私の右側からウィンドウを覗きこんでいたフェーネは、黙ったまま自分のウィンドウを操作しだした。ぱっ、と小さく光が弾けたウィンドウを見ると、どうやら彼女も可視モードに変えたらしい。はつきりと見えるログアウトボタンに細くてきれいな指が触れて、

「……………」

「……………そして何も起こらない、とー」

私の物とは違い、沈黙を保ったまま、何の変化もなかった。

くつきりと差のある2つのウィンドウを何度か見比べて、私は首をひねりながら、全員の意味を代弁した。

「……………どーなってるのやー？」

二十話 幸運と世界の違和感（後書き）

どうなっているんでしょう。

## 二十一話 幸運と世界の理（コトワリ）

とりあえず広場に居るままでは更に話がこんがらがって行くと判断して、フェーネ達が取った宿の一室へと移動した。流石に解放された環境の中でステータスを完全に開示する勇氣は無い。

完全個室の中に入ってしつかり鍵をかけてから、しばらくの間あいだこーだと色々議論していた私達4人だったが、私とフェーネのステータスを完全開示状態で突き合わせた所、ようやくそれらしい相違点に気が付く事が出来た。

「……何ですか？ この欄……」  
「んー？」

初めに気がついたのはフェーネ。今現在開いているのはステータス詳細で、奥の奥まで行けば実は一般に『隠しステータス』とされているものまで閲覧できる場所だ。もちろんごちゃごちゃと専門用語的なステータス名とそれはそれは細かい数字がびっしりと並んでいるそのウィンドウを、片端からほじくり返しまわる程の気合が無いと見つからないが。

もちろん今回はそんな奥まではいかず、一番上、つまりステータス詳細を開いてすぐの場所のまま。どこの事を言っているのか、と指先を追ってみると、そこにあつたステータス名は『現在の加護』。私のものは“有”で、フェーネのは“無”と簡単に書かれているだけのものだ。

そのままではよく分からないので『現在の加護』をタッチ。ウィンドウが切り替わり、ずらっとステータス名が並ぶ。フェーネも同様の操作をしたが変化が無かった。存在していないせいだろうか。

「『主神』“契約と友愛”ミスラ。『副神』無し。『最上位精霊』



無し。『魂の保護』“死と真財”ハイデース。『身体の保護』“暗壊と慈愛”ペルセフォネ。　って、あー、分かった、アレだ”

上から順番にステータスを読み上げていくと、その途中でソレが何か気がついた。……というか、思い出した。

ようするに、ステータスボーナスの方向性を決めるための指針のようなものだ。『Free to There』の時はまず『始まりの町』でチュートリアルを受け、それが終わると説明が入った。その時に最低限得られるのは『主神』と『魂の保護』と『身体の保護』の3つ、いや、3柱。

『主神』は全体のステータスに影響、『魂の保護』と『身体の保護』はそれぞれ魔法/物理の攻撃か防御かどちらに偏るかの影響がある。ちなみにいつでも変更する事が可能で、その方法も『加護』を得たい精霊や神の在る場所……まあ普通は神殿に行つて、「私らしくとして加護して下さい」と祈ればOKという簡単な物だ。

ちなみに神にも格と言うものが存在するので、ボーナスの大小は『加護』を受けている神の格に左右される。そして当然ながら格の高い神や精霊の神殿は、ダンジョンの奥とか秘密部屋とか世界の端とか、そういう到達困難な場所にある。

そして格の高い神や精霊であればステータスボーナスの振り幅以外にも色々之恩恵があるので、レベルカンストしたとしても宗旨替えするのは全く無駄な訳では無かつたりするのだ。ちなみに私が『加護』を受けている上記3柱は、一応かなり格の高い神だつたりする。

『主神』はギルドの加護をしている為、加入時点で自動的に。後の2柱は神殿まで行って祈りをささげ宗旨替えした。なんで神殿まで行けたかって言うと、それはもちろん、デイーグ達に引きずられていった先で隠し部屋を見つけ、その中の一角にひっそりと存在していた神殿を見つけたからだ。

閑話休題。

とりあえず『加護』について3人にざっくりと説明する。ふんふん、と素直に首を縦に振っていた彼らは、私の話が一通り終わると顔を見合わせて……あれ、なんか青くなつた？

「……つて事は……」

「やっちまつたぁー　　！！」

沈黙を挟んだと思つたら、呆然と呟く猫獣人<sup>ケットシー</sup>と頭を抱えて叫ぶドワーフ。……あ、今やっと名前思い出した。クルムとキクスだ。

そんな2人の扱いに困つてフェーネに目を向けると、こちらはこちらで唇をかみしめて悔しそうにしている。……何が何やら。とりあえずまだ冷静そうなフェーネさんに聞いてみよう。

「説明ぷりーずー」

「……塔山へ上つた途中で、小さな祠が3つ並んでいたんです。その横に緑色の人が立っていて……近寄つたプレイヤーは何か説明を受けて祈っていたんですけど、私たちは時間を惜しんで先へ進んだんです」

「成程、了解したー」

つまり、チュートリアルで受ける筈だった加護をすつ飛ばしてきちゃつたと。

と、考えて、私はふとこの世界に來た最初の時を思い出した。突然空中に放り出され、落下した先はギルドの空中要塞。

私の主神、“契約と友愛”ミスラの最も大きな祭壇がある場所にして、私が最も頻繁に祈りと願いとその対価を捧げた場所。

……最初に、まさにその場所へ放り出されたのは、本当に偶然なのだろうか？

「……………とりあえず確認するにこした事は無いから」

小さく呟いて、私は開きっぱなしにしていたウィンドウを戻った。フレンドリストに移動して、その内の4人を一括してメールの送り先に設定。浮かび上がった半透明の仮想キーボードを叩いて本文を入力。

「や、突然ごめんだけども。皆さ、最初にログインした時“どこ”に居たー？ ログアウトボタンで警告が出たかどうかと、その場所が主神の祭壇付近か、祭壇のある施設だったかどうかを合わせてできるだけ素早い回答ぶりーずー。……………ああ、ちなみに寝てたとか白々しい言い訳しやがったらー……………まあ、何が起こっても絶対に文句言わないでよねー。それだけ緊急の用事なんだからー」

ここまでを一気に入力して流れのままの勢いで送信。

……………あの戦闘狂達がこんな夕暮れを過ぎた程度の時間に寝ている訳が無い。どうせ5日間いっぱい楽しむつもりで気力の限り戦い続けてるに決まってる。経験上で予想すると、明後日の朝まで目いっぱい暴れ倒した後丸一日寝倒して、あと二日でアイテム整理とか合点とか友人巡りとか拠点への里帰りとかをぎゅうぎゅうに詰め込むつもりだろう。

ちなみに、脅迫まがいの言葉を入れたのは念のため。言ったからにはたとえどんなに困難に見えても敢行する、という私の性格をしっているあの4人には十分過ぎると思うものの、厄介事の匂いがある以上予防線を張っておくに越した事は無い。

さてこの予想が正しいかどうか、答えを持ってくる善のディーグ達は、一体どのくらいで返事を返してくるのやら。

二十一話 幸運と世界の理（ロンドン）（後書き）

続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0326u/>

---

神庭の最後の住人

2011年12月25日01時48分発行